ショットバーはかく語りき～バララライカ～

おかだ　いと

「今朝ねぇ、こんな夢を見たんだ。寝ている俺の顔の横に水滴がぽたぽたと落ちてきて、ふと、目が覚めたんだ。そしたら、山の中でよ、立ち上がったら・・・。丸裸だったんだよ。」
たかやんはスコッチ・ウィスキーを一口飲んだ。
「で、どうなったんや。」
せっかちなこうさんんが聞いてきた。
「隣に同じく丸裸の女が寝ていたんだよ。こりゃいいやと思ったら・・・。」
「おう。」
「そこで目が覚めちまったんだよ～。」
たかやんはもったいなさそうに言った。
「なんやそれ。おちがあらへんがな。」
「しょーもな。また、だまされたわ。」
バーにいた全員ががっくりした。
「けいちゃんはどう思う？」
カウンターの一番端に座っていた占い師のけいに聞いてきた。
「それってただの欲求不満よ。」
全員、妙に納得した。
「バラライカも飲んだし、もう帰るわ。」
「けいちゃん、早いね。まだ１１時だよ。」
たかやんが時計を見て言った。
「今日はね、メール占いの依頼がたくさんあってね、早めに切り上げるわ。」
けいは支払いを済ませた。
「じゃあ、みなさん。おやすみなさい。」
「気をつけて帰りや。」
マスターのもっちゃんがドアまで見送った。
マスターのもっちゃんが、１人で切り盛りしているショットバー「ルイーズ」。バーは、阪急西宮北口駅から歩いて５分ほどのアルファビルの２階にある。もう、２０年以上続いている老舗だ。
けいの家は、店を出て踏み切りを越えた住宅街にある。けいは占いで生計を立てているが、いろいろと副業もしている。
「ルイーズ」では、対面鑑定を１件３５００円とワンドリンクでしている。良心的な価格だ。そのうち１０００円をもっちゃんに渡している。
けいの家庭は母子家庭で、今年高２になる敏と２人で暮らしている。
「ただいまー。」
「おかえり。今日はどうだった？」
ジャージ姿の敏が出迎えてくれた。
「１組だけよ。やっぱり、平日は少ないわ。でも、メールの方がたくさん来ているから、片付けなきゃ。」
「がんばってね。俺、もう寝るわ。」
おやすみを言って、敏は部屋に戻った。
（とりあえず、お風呂に入ろうかな。仕事も片付けないと。）
「こんばんは。」
カラン、コロンとドアを開けながら、けいが入ってきた。
「おう、けいちゃん。いらっしゃい。」

カウンターにいる男も振り返った。
「けいちゃん、こんばんは。」
「あら、西さん、久しぶり。元気ですか？」

けいは西の隣に座った。
「元気だよ。」
けいはにっこり微笑んだ。
「よかった。もっちゃん、きのうはごめんね。お客さん来た？」
「大丈夫。来なかったよ。」
「そっか。メールが多くてね。ん～、モスコミュールを。」
「忙しそうだね、けいちゃん。２ヶ月ぶり？」
西は生ビールを口にした。西はもっちゃんと同じ４８歳で、西宮の大手保険会社に勤めている。もっちゃんとは高校の同級生だ。ダンディーなのに彼女がいなくて、いまだに独身だ。
今日はお店の火災保険の更新でやってきたそうだ。西がいると、けいは緊張してしまう。ちょっと、西に気があるのかもしれない。
「西さんも忙しそうですね。」
「けいはモスコミュールを一口飲んだ。
「忙しいよ。春には昇進できるかもしれないんだ。」
「すごい！じゃあ、所長さん？」
「まだまだ。次長ってところかな。」
「それでもすごいじゃないですか。」
カラン、コロンと若いカップルが入ってきた。
「いらっしゃいませ。」
もっちゃんはカップルの方へ行った。
「西さん、彼女できましたか？」
「直球だね。まだ、いないよ。けいちゃんは？」
「私は敏が卒業するまでは、彼氏作りませんよ。」
「もったいないなぁ。けいちゃんはもてるのに。」
「もう、４０ですよ。」
「４０には見えないよ。」
「西さんだって、若く見えますよ。」
西は仕事の時は、オールバックにして、きちんとした上質のスーツを着こなし、香りの爽やかなコロンをつけている。もちろん、男前だ。１０歳は若く見える。
「けいちゃん、仕事。」
もっちゃんが先ほどのカップルに、カンパリソーダとパイナップル・フィズを出して、戻ってきた。
「じゃ、西さん。また、後で。」
「もう帰るよ。けいちゃんに会えたし。」
「そっか、残念。じゃあ、おやすみなさい。」
けいはちょっとがっかりして、カップルの方へ行った。
「こんばんは。」
奥のボックス席にカップルが座っていた。商売道具の黒いフェルトに大きく透明な水晶を並べた。
「今日はカップルで見られますか？カップルだと５０００円かかりますが、いいですか？」

「はい、お願いします。」
大学生らしいカップルだ。若々しい。
「こちらにお２人のお名前と、生年月日を書いていただけますか？」
けいは紙を差し出し、２人は紙に名前と生年月日を書き、けいに渡した。
井上順子　１９９１年６月２日　　橋本和也　１９９１年４月９日
「ありがとうございます。どんなことを占いますか？」
「二人の将来のことを・・・。」
彼女が、彼氏を見つめながら言った。
「では、水晶にお２人の手をかざしてください。」
けいはこんなことをしなくても、２人の将来はみえるのだが、一応、占いっぽくしている。西が帰っていくのが見えた。少し、寂しい。
「はい、ありがとうございます。手を離していただいて結構ですよ。最近、お付き合いが始まったみたいですね。」
「はい。もうすぐで１ヵ月になります。」
彼女が答えた。みたところ、２年はもちそうだ。だが、結婚には縁がないだろう。
「お２人にとって、今はとてもいい状態ですね。」
２人は顔を見合わせて、微笑んだ。
「大学生の方ですよね。」
「はい。Ｋ大学の２回生です。同じサークルに入っています。」
「このままいい状態が続きますよ。彼女は地方から来られているんですよね。」
「そうです！広島県からで、下宿しています。そんなことまでわかるんですか。」
「はい。お２人の間で問題があるとすれば、就職のことですね。でも、大丈夫ですよ。今後、就職に関してはゆっくりと話し合っていってください。」
２人には注意点などを話し、この先もうまくいくと言った。
カラン、コロンとドアが開き、二人の男性が入ってきた。
「こんばんは。」
「おう、いらっしゃい。」
たかやんと青木である。２人とも西宮警察署に勤めている。たかやん（高橋　豊）は生活安全課で、今は家出人の捜索にあたっている。４３歳バツイチ、数年前に奥さんが男と家を出て行ってしまった。子供はいない。青木准一は３１歳、独身で鑑識課にいる。２人とも西宮の独身寮に住んでいる。青木はビッグスクーターで通勤している。飲みにいく日はたかやんの運転手役なので、酒は飲めない。たかやんはいつも、スコッチ・ウィスキーを浴びるほど飲む。
「けいちゃん、お仕事中だね。」
たかやんは差し出されたダブルのスコッチ・ウィスキーを一口飲んだ。
「マスター、トマトジュースってありますか？なんか、無性に飲みたくて。」

青木が言うと、
「あるよ、ちょっと待ってて。」
もっちゃんが急いで、向かいのコンビニに買いに行った。
（なんか悪いことしちゃったなぁ。）
すぐに、もっちゃんが帰ってきて、トマトジュースにレモンを添えて出してくれた。
「ありがとう、マスター。」
「いいんよ。」
占いが終わり、カップルは奥のボックス席で満足そうに話していた。けいは、たかやんの隣に座った。
「おふたりさん、こんばんは。」
「けいちゃん、お疲れ。」
「お疲れ様です。」
「けいちゃん、作り直そうか？」
「大丈夫よ。」
けいは、すっかり氷の解けてしまったモスコミュールを飲んだ。
「西さん、来てたんですか？」
青木が聞いてきた。
「うん、さっきまでいたわ。どうして？」
「ほのかに香りますね。」
「その匂いも俺が消すよ。」
たかやんはセブンスターに火をつけて、煙を吐き出した。
「保険屋さんはうるさいからね。」
「もっちゃん、バラライカお願いします。」
けいはいつも最後にバラライカを頼む。
「もう帰るのかい？」
もっちゃんがバラライカを作り始めた。
「さっき、カップル占いしたし、久しぶりに西さんに会えたしね。」
「保険屋さんに気があるのかい？」
「たかやんよりは気があるわ。」
「へいへい。」
たかやんは、グッとスコッチ・ウィスキーを飲み干した。
「どうぞ。」
もっちゃんがバラライカのロックスタイルをけいの前に置いた。
「ねぇ、もっちゃん。西さんって何で彼女いないんだろう。男前なのに。」
「男は顔だけじゃないぞ。」
たかやんが口を挟んだ。
「そうかなぁ。身なりはきちんとしているし、優しいし、気配りできるし。」
「２年前まで彼女はいたよ。」
ふうん、と、けいはウォッカのキュッとした飲み口に酔いしれた。

もっちゃんはたかやんのスコッチ・ウィスキーのおかわりを置いた。
たかやんは今日３本目のタバコに火をつけた。
「たかやん、タバコ減らしたら？」
けいが心配そうに言った。
「値上がりしたからやめようかと思ったけど、だめだったよ。」
「また、値上がりするかもしれないわよね。」
「そうさ、今度こそ、かなぁ。なぁ、けいちゃん。今月も頼めるかな。」
「いいですよ。でも、本当は部外者はいけないんでしょう？」
「FBI だって超能力者に依頼しているぐらいだから大丈夫だよ。非公開だけど、署長の許可も下りているしね。」
「そうだけど。」
「大丈夫。係長になれたのは、けいちゃんのおかげやし。」
「家出人、発見率県下一ですしね。」
青木が褒めた。
「そっか。じゃあ、明日に備えて、そろそろ帰ろうかな。ごちそうさま。」
もっちゃんが会計の紙を出した。『西のおごりで』と、書いてあった。けいは戸惑った。
「あの。」
「いいよ。大丈夫。」
「「じゃあ、・・・素直に。ごちそうさまでしたと伝えてください。」
「うん、言っとくよ。」
「たかやん、明日はいつも通り１０時でいいのかな。」
「悪いけど、頼むよ。」
「了解。じゃあ、皆さん、おやすみなさい。」
カラン、コロンとドアを閉めて、けいは店を出て行った。
「僕、送っていきます。」
青木はけいの後を追って、店を出た。
「あいつ、年上好きだから、お熱上げてるな。」
たかやんは、スコッチ・ウィスキーを口に含んだ。
「けいさん、待ってください。」
青木は足早にけいに追いついた。
「青木さん、どうしたの？」
「家まで送っていきますよ。」
「大丈夫よ。すぐそこだから。」
「心配だから。」
「ありがとう。」
けいは立ち止まって、礼をした。
「お願いします。」
「寒くなりましたよね。」

２人は踏み切りをこえた。
「寒くなりましたよね。」
「そうね。風邪に気をつけてね。」
「ありがとうございます。敏君って、今、高２ですよね。」
「そうよ、あっという間。警官になりたいって。」
「そうなんですか。兵庫県警ですよね。」
「うん、第一希望はね。」
「受かるといいけどね。」
「そうなの。ほかにも、府警受けるけど。」
コンビニを曲がったところある『にしきたコーポ』がけいのアパートだ。
「よかったら、お茶していく？」
「え、いいんですか？」
「遠慮しないで。たかやんは、まだしばらく飲んでるわよ。」
１０３号室。表札は掲げていない。ドアにはハロウィンのリースが飾ってある。
「ただいま。まだ起きているかしら。」
「おかえりー。」
敏の部屋から声が聞こえてきた。
「青木さん、来たわよ。どうぞ。」
「おじゃまします。」
カントリー風に統一された部屋。家具はインテリアコーディネーターをしているもっちゃんの彼女に選んでもらったものだ。
「何飲みます？」
「じゃあ、ミルクティーを。」
「了解。」
「こんばんは。」
ジャージ姿の敏が出てきた。
「敏君、こんばんは。県警受けるんだって？」
「はい。後、半年ぐらいなんで、不安なんですよ。」
「僕もそうだったなぁ。」
「他のやつより試験早いから、余計焦るんですよ。」
「そうだよね。でも、焦りは禁物だよ。気を大きく構えなくちゃね。けいさんは家に帰ると、表情が変わりますね。」
「そう？」
けいは暖かいミルクティーをテーブルに置いた。
「やっぱり、お母さんの顔になりますね。」
「外にいると１人だから、気が張るのよ。」
「そうですよね。あ、いただきます。おいしい、こんなコクのあるミルクティー初めてだ。」
「母さんのはね、牛乳から作るの。チャイってやつ。」

「へぇ、そうなんだ。」
敏は青木のことが気に入っている。そんな２人の会話をけいはにこにこしながら聞いていた。
「試験の面接はどうでしたか？」
「とにかく緊張したなぁ。いろいろと突っ込んで聞かれたから、今から答えを考えたほうがいいよ。」
「はい、ありがとうございます。たかやんさんは高卒で？」
「うん、ずいぶん前の話だけどね。」
「そうよね、大昔だわ。」
けいは笑いながら言った。
けいはいつも気難しい表情をしているが、青木はけいの笑った顔が好きだ。青木自身まだ黙っているが、彼も母子家庭だったので敏の気持ちがよくわかる。母を喜ばせるのが、一番嬉しかった。
「じゃあ、僕、勉強するんで、おやすみなさい。」
敏は部屋に戻っていった。
「ほんとに勉強やってんだか。最近、彼女ができたみたいなの。」
「よかったじゃないですか。」
「しょっちゅう、電話やメールしてるわ。」
「なつかしいなぁ。高校生か・・・。」
「もてたでしょ？」
「そんなことないですよ。けいさんこそ・・・。」
けいはにこりとだけ微笑んだ。
「僕、そろそろ戻らなきゃ。」
「ごめんね、引き止めちゃって。送ってくれて、ありがとう。」
「大丈夫ですよ。チャイ、ごちそうさまでした。おいしかったです。」
「どういたしまして。気をつけて帰ってね。おやすみなさい。」
「おやすみなさい。」
けいは青木を玄関から見送った。
ルイーズに戻ってくると、たかやんは待ちかねていたようだった。
「お、待ってたぞ。そろそろ、酔いつぶれそうだ。」
「すみません。」
「じゃあ、帰るぞ。」
支払いは済ませているようだった。２人はもっちゃんにおやすみを言って、店を出て行った。外に止めておいたバイクにキーを差し込んで、エンジンをかけた。
「ごちそうさまでした。」
「おう。何か進展はあったのか？」
「何もありませんよ。」
２人はヘルメットをかぶり、青木が運転して宿舎に向かって走り出した。
翌日、１０時にスーツ姿のけいが西宮警察署についた。２階からちょうどたかやんも降りてきた。

「お。グットタイミング、けいちゃん。」
「おはようございます。」
「スーツ姿も似合うね。グッとくるよ。」
「ありがとう。」
２階に上がり、生活安全課に来た。けいは手土産を持って、課長に挨拶をした。
「おはようございます。１週間、よろしくお願いします。」
「いやいや、気を使わせて悪いね。こちらこそ、よろしく頼むよ。」
けいはたかやんの後ろについて、デスクに案内してもらった。パソコンを操作して、パスワードを入れ、捜索願いの画面にした。
「じゃあ、お願いします。」
「了解。」
けいがパソコンで調べるのは「家出人」であり、「特異家出人」ではない。「特異家出人」というのは、幼児や病人、老人など事故、事件に巻き込まれている可能性のある場合だ。けいはこの「特異家出人」は見ず、普通の「家出人」を探すのが仕事だ。数ヶ月に１度、１週間ほどパソコンとにらめっこしている。
この間、ルイーズでは仕事をしない。課長から寸志と昼食券がもらえる。占いに比べると、報酬は少ないが社会のために、自分の力が発揮できるのでやりがいがある。
まずは、今月リストアップされた所轄管内の家出人を見る。西宮はわりと治安がいいので、あまり事件に巻き込まれている人はいない。今月の家出人は２０人弱だ。今月の家出人をプリントアウトして、一枚ずつ見ていく。
１人目をリンク（今の人の心を読み取る能力）してみる。
Ｔ氏（３６歳）男性
「不倫の末、妻子を残して九州北部、愛人の故郷で暮らしている。戻るつもりはないようだ。新しい職に就いているようだ。」
と、余白に書いていく。
家出人によって、リンクできる時間は違う。けいの疲労も加わるので、２０人弱でも１週間ぐらいかかる。
２人目、Ｙ氏（２１歳）女性
「自宅に帰ってきている。」
こういう場合は、たかやんが自宅に確認の電話を入れて、確認してから記録を削除する。家出人の取り下げを忘れている人が多い。
２人目の確認が終わったところで、お昼になり、たかやんと一緒に食堂に食べに行った。
「今月は全員できるかしら。」
カレーを食べながら、けいは言った。
「あんまり無理すんなよ。」
たかやんが日替わり定食のとんかつにかじりながら言った。
「うん。今日、青木さんは？」
「あいつは非番だ。ジムに行くとか言ってたな。」
「鑑識はあまり動かないからね。」

「あいつ、あんなに筋肉つけてどうするんだろう？」
「そんなにすごいの？」
「マッチョは好きかい？」
「お腹ぽっこりの中年男よりはいいわ。」
「悪かったなぁ。さてさて、タバコでも吸ってくるかな。午後もよろしくな。」
「了解です。」
けいはコーヒーをゆっくり飲んだ。

午後から３人目の「家出人」をリンクしていると、ふと、けいの手が止まった。
安藤　哲也　昭和４６年８月１０日生まれ　男性　独身　無職　住所　西宮市上ヶ原七番町　届出人　安藤　宏一（父親）

さらに、意識を集中して、この安藤という男の思考にリンクしてみる。
（東京にいるわ。何度も同じところに通っている。パソコンの画面を熱心に見ている。夜行バスに乗っているところ。『考』という文字。ネット繋がりの関係・・・。）
ふいに、ぽんと肩を叩かれた。けいは急にリンクがはずれ、急激な頭痛にみまわれた。
「大丈夫？けいちゃん。」
たかやんだった。
「すごい怖い顔をしているよ。」
「びっくりしたわ。仕事中は声をかけないでっていってるでしょう。」
「ごめん、ごめん。冷や汗？」
「ほんとだ。」
けいはハンカチで額をぬぐった。
「そいつは怪しいの？」
「う～ん、まだよくわかんないけど、東京にいるみたい。」
「無理すんなよ、けいちゃん。」
「ありがとう。今日はこのくらいにしとくわ。この人、気になるわ。」
「大丈夫か？」
「ちょっと頭痛が。でも、大丈夫よ。」
まだ心臓がドキドキして苦しい。けいは机の上の書類を整理した。
「これは、解決分。こっちは自発的失踪ね。」
「ありがとう。これからはこっちの仕事だ。」
「この人の分、預かってもいいかしら？」
「こっそりな。お疲れ。」
「じゃあ、また明日。」
机の上を片付けて、課長に挨拶をして帰っていった。
「ただいま。あれ、カレーの匂い？」
「母さん、お帰り。カレー作ってみたんだ。」

けいはにっこり笑った。
「ありがとう、作ってくれて。カレー作るの初めてじゃないの？」
「味は保障しないよ。」
（お昼にカレー食べるのやめとけばよかった。）
「俺、もうお風呂入ったから、母さん入ってきたら？」
「うん、そうする。いたた。」
けいの頭痛はまだ治まってなかった。頭痛薬を取り出して飲んだ。
「どうしたの？」
「ちょっと頭痛が。薬飲んだから、大丈夫よ。」

その夜、けいは部屋で気になった「安藤」という男の家出人票のコピーを取り出して見ていた。署でリンクした言葉を読み返していた。
再び、リンクを試してみる。頭がズキズキする。「信」という文字が浮かんできた。そして、暗闇の中から指が２本すっと現れ、けいの目を突こうとしてきた。
「きゃっ。」
けいはとっさにのけぞった。初めての経験だった。
「死んでいる？」
翌日もけいは、生活安全課にいた。昨日、みていた「安藤」を詳しく調べてもらった。
「ああ、先月、東京で、車内でガソリンをかけ焼身自殺を図り、発見されている。歯型が一致している。家が近くやし、ちょっと事情を聴いてくるわ。」
「ありがとう。」
たかやんは部屋を出ていった。
お昼前にたかやんは戻ってきた。
「やっぱり、家人の取り下げ忘れだったよ。なにせ、ばたばたしていたらしい。うつ病で通院していたそうだ。」
「ありがとう。車は本人の？」
「レンタカーだったよ。」
「でも、変ね。わざわざ東京まで行って自殺するなんて。」
（それに、今、生きていなきゃ、安藤をリンクできないはず。）
「そこなんだよ。今、流行っている何とか・・・っていうアイドルグループのコンサートを観にいったらしい。その後、焼身自殺だ。自宅に、もう思い残すことないからという主旨の遺書が残されていた。」
「最後にコンサートを観てからねぇ。」
「警視庁では、事件性はなく、自殺と断定している。」
「ふうん・・・。」
「さ、めし食いに行こうぜ。」
「うん。」
けいは納得いかなかった。

「よう、青木。」
食堂で青木が食事していた。
「あ、高橋さん、けいさん。」
「こんにちは。」
「きのうはジムに行ってたのかい？」
「はい。先週行けなかったんで、久しぶりに体を動かしましたよ。けいさん、スーツ姿も似合いますね。」
「女教師って感じだろ。」
「ほんと、お口が上手ね。」
「明日も来られるんですか？」
「明日は俺が非番だけどな。といっても、今月分はほとんど見てもらったんだけどな。」
「早いですね。」
「でも、『安藤』氏には納得がいかないわ。」
「これだよ、東京からきた検分。」
青木は箸を置き、書類を受け取った。
「焼身自殺かぁ。歯型も一致しているし、本人の指紋とレンタカーの会社員の指紋しか残っていないし、状況的にもいって、これでは自殺でしょうね。」
「警視庁も事件性がないと断定している。自宅に遺書が残されているしな。けいちゃん、なんか気になるんか？」
「うん、ちょっとね。」
「何が気になるんですか？」
青木は聞いた。
「この人、まだ生きてるような気がして・・・。」
「え？」
２人は驚いた。
「リンクできるのよ。私は死んだ人にはリンクできないわ。どういうことかわからないけど。この人、リンクできるし、リンクしようとするとひどい頭痛がするの。」
「体調が悪いんじゃないですか？」
「そうなのかもしれないけど・・・。なんか、納得いかないのよね。」
西宮警察署での仕事が終わり、元の生活に戻った。
カラン、コロンとルイーズのドアを開けた。
「こんばんは。」
「おう、けいちゃん。仕事終わった？」
「うん、お客さん来た？」
「何組か来たけど、大丈夫だったよ。」
「ごめんね。ウォッカ・ライムを甘めで。」
「あいよ。」

けいはカウンターに客がいないと、必ず窓際に座り、下の通りを歩く人たちを見ながら飲んでいる。ふと、風景に溶け込んでしまう気がする。
あの強烈な頭痛も「安藤」をリンクしないと、嘘のように治まっている。もっちゃんがウォッカ・ライムを持ってきても気づかないくらい「安藤」のことを考えていた。
カラン、コロンとまた１人、客が来た。
「けいちゃん。」
西がけいの横に来て声をかけ、けいは気づいた。
「あ、西さん。こんばんは。」
西はけいの横に座った。
「何か考え事かい？」
西はけいのグラスを取って、一口飲んだ。
「ウォッカ・ライムだね。」
「当たり。西さん、この前はごちそうさまでした。」
「・・・ああ、そうだったね。忘れていたよ。どういたしまして。」
「相変わらず、忙しいんですか？」
「まあね。しばらく来れなくなるんだ。来週、誕生日だよね。」
「そうですけど。なんで知ってるんですか？」
「クライアントの情報は頭に入っているからね。これ、誕生日プレゼント。」
小さな紙袋を手渡した。
「え、私に？いいんですか？」
「開けてごらん。」
「嬉しい。ありがとうございます。」
けいは紙袋の中から、リボンのかかった小箱を取り出し、箱を開けた。
「わぁ、素敵。」
ピンク色に輝くネックレスが入っていた。
「ローズ・クォーツといってね、恋愛に効くパワーストーンだよ。けいちゃんはいつも頑張っているからね。自分へのご褒美だと思って受け取って。」
「でも・・・。」
「つけてあげる。」
西はけいの髪を寄せて、ネックレスをつけた。
「うん、似合うよ。」
「ありがとう、西さん。」
「じゃあ、帰るね。」
「え、もう？」
「まだ、仕事が残ってるからね。」
じゃあ、と言って西は店を出て行った。
もっちゃんがやってきた。
「けいちゃん、よかったやん。きれいだよ。」

「うん、嬉しい。」
けいはコンパクトミラーを取り出して眺めた。
「口説き落とそうとしているのかな、あいつ。」
「そうかなぁ。でも私じゃ、とても西さんの彼女になれないわ。なんか西さんって上流階級の人って感じだもん。」
都内、某所の２ LDK のマンションの一室に『考』がいた。
「やっぱり、東京のほうがやる気が出るだろう。」
『義』が言った。
「そうだね、『義』もいるし、盛り上がれるよね。」
考はボールペンをくるくる回しながら言った。
「今日はいくら稼いだ？」
「少ないっすよ。２千万ほど。あまり派手にやると見つかるかと思って。」
「『忠』がいるから大丈夫だよ。そうだな、やっと全員集まったし、本格的に始めないとな。」
「何か腹減ってきたな。食料調達してくるわ。」
義は部屋を出て行った。がらんとした部屋に、３台のパソコン。死んだはずの安藤の姿がそこにいた。
「お待たせしました。」
４０代後半の男『信』が、日本橋のビジネスホテル「グローバル」の７０８号室に入ってきた。
「『伏姫』はご帰宅か？」
５０代半ばの男、『忠』が聞いた。
「はい、先程自宅へお送りしました。」
「急に呼び出してなんだ？直接会うのはまずいぞ。」
「『考』がリンクされたんです。」
「何？誰かしくじったのか？」
「神戸の方にリンクできる者がいて、『考』をリンクしてきました。自殺処理は失敗していません。リンクしてくる度に、妨害工作はとりました。」
「神戸からか。誰かわからないのか？まずいぞ。小さな火種からも、火事は起こる。お前のことは知られているのか？」
「女なんですが、こちらからリンクすると、『安藤』とは結びついていないようです。『伏姫』に報告しますか？」
「いや、まだしないほうがいいだろう。お前はリンクしてくる女の身元を調べろ。」
「わかりました。」
「身元が判明しだい、いつもの４人を行かせろ。」
『忠』はいらだちながら、急いで部屋を出て行った。
「あれ、青木さん、今日１人？」
もっちゃんが驚いた。

「たまには僕も飲みたいんですよ。」
「そうやな、いつもドライバーだからな。何飲む？」
「生ビールを。」
「了解。」
「けいさん、今日は来るんですか？」
「けいちゃんなら、もうそろそろ来る時間だよ。はい、おまち。」
生ビールとスナックを出した。
「けいちゃんに何か占ってもらうのかい？」
「そういうわけじゃないんですけど。」
カラン、コロンとドアが開き、けいが入ってきた。
「こんばんは。あら、青木さん、１人？珍しいわね。」
「マスターにも言われましたよ。」
けいは青木の隣に座った。
「たまには、１人で飲みたくなるわよね。もっちゃん、カンパリソーダを。」
「了解。」
（うまく誘えるかな。いつもの連中が来る前に店を出なきゃ。）
もっちゃんはけいにカンパリソーダを出した。
「乾杯。」
コツンと青木のグラスに当てた。
「あ、あの、けいさん。いきなりですが、今夜、食事でもどうですか？」
「今？」
「仕事があったら、いいんですけど。」
「う～ん、いいわよ。もっちゃん、今日休んでもいいかな？」
「うん、いいよ。」
（よかった。）
青木は一気にビールを飲み干した。
けいはくすくす笑った。
「ちょっと待って、青木さん。急がないで。どこ行く？」
「何が食べたいですか？」
「そうねぇ、お好み焼きがいいかな。」
「じゃあ、『まる平』ですね。外で、待っててください。すぐ、行きます。」
「うん。もっちゃん、残してごめん。」
けいは店を出た。
「楽しんで来いよ。」
もっちゃんがにっこり微笑んだ。
「はい、ありがとうございます。」
階段を下りたところに、けいはいた。
「ごちそうさまでした。」

「いえいえ。」
青木は何も言えず、頭の中でいろんな言葉がうずまいていた。うまく話せるか、退屈させないか・・・。
けいも何も言わず隣を歩いた。
ルイーズからまる平へは、歩いて数分のテナントビルの地下にある。もっちゃんもよく夕飯用に買いに来ることがある馴染みの店だ。
「こんばんは。」
「いらっしゃい！」
店主が元気よく、水を持ってきた。
「何にします？」
「僕は、ん～、イカ玉と生中で。けいさんは？」
「私は豚玉で。自分で焼きます。」
「はい。少々お待ちください。」
鉄板に火をつけ、店主は戻っていった。
「今日はどうして１人なの？たかやんは？」
「高橋さんは夜勤です。いつもドライバーなんで、たまには飲みたいなと思って。」
「はい、お待たせ。」
生中とお好み焼きの材料を持ってきた。この店は、自分でも焼かせてくれる。
けいは青木のイカ玉を取って、慣れた手つきで手早く具をかき混ぜ、鉄板に流した。自分のも同じように焼いた。
「ちょっとけいさんに聞きたいことがあって。」
「どうしたの？」
「あの、片思いの人がいて、その人とどうなるのか聞きたくて・・・。あ、でもリンクできるんですよね。やっぱ、いいです。」
「何だ、残念。リンクはしないで、話は聞くから。みんなには秘密だよ。」
それでも、と青木は固辞した。
「けいさんって好きな人いるんですか？」
「いないわよ。まだ、彼氏作る気分じゃないし。」
「どうしてですか？」
「まだね、敏が小さい頃、２年ほど同棲していた人がいたんだけど、敏と彼氏の間がうまくいかなくてね。おまけに私も拒食症になっちゃって、別れたわ。それからはもう、敏と二人で生きて行こうって決めたの。」
「まだ若いのにもったいないですよ。」
「青木さんぐらいじゃなきゃ若くないわよ。さ、焼けたわ。」
けいは焼きあがったお好み焼きを切り分けた。
「ねぇ、片思いしている人って同じ署の人？一般人？」
「一般の方です。それ以上は勘弁して下さい。リンクもしないでくださいよ。」
「はい、わかりました。うまく焼けたかな。食べよう。」
「うん、おいしいですよ。」

「ほんと、おいしいね。青木さんって非番の時、何してるの？」
「そうですね、ボクシングのジム行ったり、バイク乗ったり、反対に家でじっと本読んでたり。鑑識だけど警察官なので、体は鍛えとかなきゃいけないし。」
「たかやんが言ってたけど、筋肉すごいんでしょう？」
「それほどでもないですよ。」
青木はおとなしい印象があるが、行動派でもある。普段、地味な仕事をしているので、非番の時は体を思い切り動かしたいのだろう。青木はけいとゆっくり飲みに行きたかった。なんと言って、誘おう。
「仕事は順調？」
「そうですね。いくつか難題は抱えていますが。」
青木の声が遠くなっていった。誰かにリンクされているような気がする。頭痛がしてきた。
「けいさん、大丈夫ですか？」
青木がけいの手をぎゅっと握った。
「あ、ごめん。急に頭痛がして。」
「急に顔色が悪くなったんで、びっくりしましたよ。」
「食べたら、飲みにいこっか。」
「けいさん、飲んでも大丈夫ですか？」
「うん、もう大丈夫。」
「心配だなぁ。」
「『アライブ』に行こう。」
食事を終えると、支払いを済ませ、地上に出た。一気に寒くなった。
「わぁ、寒い。もう冬ね。」
「そうですね。」
四つ角を曲がり、『アライブ』に着いた。
「こんばんは。」
「いらっしゃい。久しぶりだね。」
５０代後半のマスターだ。この店は３０年ほど続いている。かかる曲は５０'S だ。すでに客が何人かいた。２人はカウンターの一番奥に座った。
「ゴッドファーザーをお願いします。」
「私はブラック・ルシアンを。スコッチ・ウィスキーなんて、たかやんの影響かしら？」
「そうかもしれませんね。」
２人はマスターがカクテルを作っているのを眺めた。
「けいさんのリンクの能力って、具体的にどういうものなんですか？」
「そうね、例えば写真とかその人のイメージを思い浮かべることで、その人の過去や現在、未来の心が読めたりするの。透視って言ったら近いのかな。でも、意識してしないとリンクできないわ。」
「じゃあ、今の僕の心ってわかるのですか？」
「意識を集中するとね。でも、最近は頭痛がするから、あまりリンクはしたくないわ。」
「僕の心はリンクしないでくださいね。」
「何か隠してるの？リンクはプライバシー侵害だからしないわよ。安心して。」

「よかった。」
マスターがカクテルを持ってきた。
「はい、ゴッドファーザー。お嬢さんは、ブラック・ルシアン。」
「ありがとう。乾杯。」
グラスをカチンと鳴らした。
「いつ頃からリンクできるようになったのですか？」
「そうねぇ、小学生の頃にはできていたわ。最初は、テストの時、先生のことをじっと見て答えが見えたのが、きっかけだったような気がする。あ、一口ちょうだい。」
「どうぞ。じゃあ、僕も一口。」
「ウィスキーだ。」
「コーヒーだ。」
けいはアルコールが強くない。せいぜい２杯が限界だ。だから、お酒を飲むときは何を飲むか慎重に決める。青木といると素の自分になれるような気がして、リラックスできる。リンクしないでも、青木の気持ちはなんとなくわかる。
「この前、『安藤』に引っかかってましたよね。」
「そうなの。私は亡くなった人にはリンクできないんだけど、この人は、今、できるのよね。だから、生きているのかなって。」
「他に何か気がついたことはあるんですか？」
「考えると書いて『考』、義理の『義』、信用の『信』。名前の一部みたいだけど、よくわからないの。」
「考・義・信かぁ。まるで八犬伝みたいだな。」
「はっけんでん？」
「ええ、南総里見八犬伝です。僕、歴史物好きだから。あと、忠実の『忠』、りっしん偏に弟の『悌』、仁義の『仁』、智恵子抄の『智』、礼儀の『礼』の５つです。」
「そんなこと、ぜんぜん思いつかなかったわ。」
「あと、リーダー格の『伏姫』です。でも、もう安藤の件は終わったことですから、深追いしないで下さいね。また、頭痛がひどくなりますよ。」
「うん。でも何か、納得いかないのよね。ねぇ、青木さんはどうして警察官になろうと思ったの？」
「面接みたいですね。」
青木は笑った。
「鑑識に憧れていたんですよ。鑑識みたいな細かい作業が好きなんです。それに、早く公務員に就職して親を安心させたかったし。」
「そうなんだ。青木さんの影響かな、敏も鑑識になれたらいいなって。奨学金出るから、大学行ってもいいのよって言ったけど、就職するって言うし。青木さんの実家はどこなの？」
「中山寺です。実はうちも母子家庭なんですよ。じいちゃん家に住んでたけど。」
「えっ？そうなの？」
「だから敏君の気持ち、よくわかるんです。」
「お母様は再婚されたの？」
「いいえ。何人か遊び友達はいますけど、今も再婚はしていません。」

「そうなんだ。今はまだ敏が学生だから、恋愛はしないわ。それに、同棲で懲りちゃったから、恋愛は封印しちゃった気分。」
「僕は何年でも待ちますよ。」
「え・・・。」
「あ、次は何、飲もうかな。マスター、僕はラム・ライを。けいさんは？」
「私はバララライカを。」
マスターは軽くうなづいた。
「これで終わりですね。」
「うん、お酒はバララライカでおしまい。青木さんってお酒強いの？」
「いけないんですけどね、まだ限界がわからないんですよ。」
「飲み過ぎないように気をつけてね。」
「自分でも怖いんで、気をつけます。あ、時間、大丈夫ですか？」
けいは時計を見た。
「うん、まだ大丈夫よ。敏はいつも遅くなるの知ってるけど、一応、メールしとくね。」
「よかった。安心した。」
「気を使ってくれてありがとう。」
「けいさんって、西さんのこと好きなんですか？」
「いきなり、直球ね。西さんのこと、好きよ。でも、お友達としてね。西さんはとても難しい人なのよ。」
「難しいって？」
「西さんは誰とも結婚する気はないの。けど、彼女はほしい。私は、そういう考えの人とはお付き合いしたくないわ。恋愛の延長線上に結婚がある。古いかな？」
「そんなことないですよ。やっぱり、付き合うなら、責任持たないといけないと思うし。」
青木は、けいが西に気がないことを知って、ほっとした。
「西さんは悪い人じゃないんだけどね。」
「頭痛は大丈夫ですか？」
「うん。もう大丈夫。」
「これ飲んだら、帰りましょうか？」
「そうね、ちょっとお化粧直しに行ってくるわ。」
化粧室から戻ると、青木は支払いを済ませているようだった。
「あ、ごめんなさい。また、ごちそうになって。」
「いいえ。こちらこそ、今夜、無理行って付き合ってもらったから。」
２人がマスターにおやすみを言って店を出ると、外はすっかり冷え込んでいた。
「タクシーに乗りますか？」
「大丈夫よ。近くだし、酔い覚ましにもなるわ。あ、そうか。青木さんはタクシーじゃないと。」
「けいさんを送ってから乗りますよ。けいさんが風邪を引かないか心配で。」
青木からの愛情が伝わってくる。
「いつもありがとう。」
「今夜はけいさんといろいろ話せてよかった。」

「私も楽しかったわ。青木さんって、もっと寡黙な人かと思っていたけど、けっこう話せるのね。」
「今夜はお酒も入っていたし。もともと話すほうじゃないですよ。」
「そうね、ルイーズでもおとなしいし、っていうか、たかやんがうるさすぎるのよね。」
「そうですね。」
２人は笑い、コンビニを曲がった。
「送ってくれてありがとう。とっても楽しい夜でした。ごちそうさまでした。」
「いえいえ、こちらこそ。敏君、大丈夫かな。」
「メールの返信ないから、もう寝てたのかも。お茶でも飲んでく？」
「ありがとうございます。でも、今日はもう帰ります。」
「タクシー呼びましょうか？」
「駅まで歩いていきますよ。このひんやりした空気が好きだし。」
「じゃあ、気をつけて。おやすみなさい。」
「おやすみなさい。」
青木はいろんな感情を抑えて歩き出した。振り返ると、けいが手を振っていた。青木も手を振った。

翌日、たまっていた仕事を片付けたら、もうお昼をすっかり過ぎていた。ふと、昨夜のことを思い出した。
（青木さんかぁ、うちも母子家庭だから同情してくれているのかなぁ。）
ふと、机の上の安藤の書類が目に入った。
（生きているんだけどなぁ。リンクしてみようか。）
けいは、目を閉じて安藤にリンクしてみる。安藤が見ていた視界が映像を早送りにしたように見えてくる。夜行バス、新宿の駅、マンションかアパートの一室、パソコンの何かグラフのような画面・・・。
突然、映像が途切れ、真っ黒になった。
（お前は誰だ？どこにいる？）
また、強烈な頭痛が襲ってきた。けいは、すぐにリンクをとき、目を開けた。やはり、リンクのできる仲間がいる。そして、安藤は生きている。けいは確信を持った。
（お前は誰だ？どこにいる？）
再び、強烈な頭痛が襲い、リンクされてきた。けいは、とっさに目を閉じ、心を閉ざした。怖い。１０分ほど過ぎたところで、向こうは諦めたのかリンクが切れた。けいはそのまま倒れてしまった。
「母さん、母さん！」
気がつくと、敏が呼んでいた。
「敏・・・。」
「大丈夫？救急車呼ぼうか？」
「なんとか大丈夫よ。今、何時？」
「もう６時過ぎてるよ。どうしたの？」
「ごめんね。お昼にリンクされて、そのまま倒れてしまったのかしら。」
「もう、リンクなんかしないでよ。母さんがいなくなったら、僕１人なんだよ。」
「ごめん、気をつけるね。すごく強い力だったの。」

「リンクされると頭痛がするの？」
「その人からリンクされると頭痛がするみたい。強い力を持った人だわ。」
「誰がリンクしてきたの？」
「中年の男性の声だったわ。」
「知ってる人？」
「知らない人よ。」
「もう、母さん。心配だからやめてよ。」
「気をつけるわ。どうしても、気になることがあるの。さあ、お腹も減ってるでしょう？夕飯食べに行こうか。何がいい？」
「ギョーザ。」
「いつものところね。」
敏は母の意識が戻って安心した。
今から半年ほど前。現官房長官、長沢久信が暗殺未遂事件に巻き込まれた。犯人は梅川龍也、５３歳。ネットで購入した銃で、街頭演説中の長沢めがけて３発続けて撃ち、その１発は SP に当たり、４発目ですぐに梅川は自分の頭を撃ち抜き、死亡するという事件があった。梅川の自宅に梅川自筆の犯行声明文が残されていた。また、精神病院に入院歴があったので、事件は深く追求されなかった。
フリージャーナリストの川島哲司がこの事件に関心を持っていた。梅川には確かに入院歴があるが、１０年前のことで、病名もうつ病で１ヵ月ほどだった。他人を攻撃するという性格は全くなく、控えめでおとなしい性格だった。もう、すでにうつ病も完治していて、通院はしていなかった。ただし、梅川には保証人の関係で、多額の借金があり、余裕のある生活は送れていなかったという。梅川は都内の印刷所に勤め、無口でまじめに働いていたという。犯行当時は変わった様子は全くなかったという。借金があるのに、パソコン一式を買い、銃まで手に入れているか、なぜ、長沢官房長官なのか、川島は疑問に思っていた。
梅川の自宅の犯行声明文には、
「日本の悪の象徴、長沢を処罰する。」
と、自筆で書かれた犯行声明文が、がらんとした部屋に残されていた。筆跡鑑定でも本人のものだった。梅川本人のみの指紋も出てきた。
事件当時、川島は次期官房長官と噂されていた深瀬由美子代議士に、インタビューを申し込んだが無理だった。川島は直感で、深瀬代議士が事件にかんでいるのではないかと疑っていた。
深瀬代議士は将来、初の女性内閣総理大臣になるのではないかと噂されている。主婦層の受けもよい。しかし、現官房長官も有能なので、川島は深瀬代議士が何か裏工作をしているのではないかと考えていた。
深瀬代議士と第一秘書の竹内は帰途についていた。
「まだ、あのネズミが張り付いているの？どこまで調べているの？」
「梅川のほうから、足をつけようとしています。」

「何かしくじったの？」
「それはありません。勘が鋭いというか、私のところまで取材を申し込みにきました。もちろん断りましたが。リンクしたところ、なぜ長沢を狙ったのかという点でこちらを疑っているようです。」
「何か起こす前に、例の４人を使いなさい。」
「かしこまりました。」
「くれぐれもしくじらないようにね。神戸のリンクできる人間はどうなったの？」
「まだ、はっきりとした所在はつかめていません。『考』のことばかりリンクしています。」
「本当に何をしくじって疑われることになったのよ。」
深瀬代議士の自宅に着いた。
「またリンクしてみます。」
「お願いね。お疲れ様。」
深瀬代議士は車を出た。竹内は実行犯の４人に、
「川島の件、いつでも決行できるよう、指示を待て。」
と、メールした。竹内はリンクのできる『信』であった。

カラン、コロンとルイーズのドアが開いた。
「お２人さん、いらっしゃい。」
「こんばんは。」
青木は占いをしているけいを見つけ、カウンターに座った。
「青木君は何飲む？」
「僕は、温かいレモネードを。」
「はいよ。」
もっちゃんは作りにいった。
「けいさんが気にしていたけど、安藤はなぜ頻繁に東京へ行っていたんでしょう？」
「両親の話だと、アイドルのコンサートに行くと言って、月に一回は東京に行っていたらしい。」
「鬱なのに、行動的ですね。家では何をしていたのでしょうか？」
「パソコンばかりしていたらしい。」
「こんばんは。パソコンはどこにあるの？」
けいは占いを終えて青木の隣に座わり、こっそり言った
「この前はありがとう。」
「パソコンは東京に持っていき、燃えたレンタカーの中にあった。でも、何か硬いもので完全に叩き壊されていて、ガソリンもまかれて燃え尽きていたそうだ。データは残っていなかった。」
たかやんはメモをめくりながら言った。
「データはなしか。何でパソコンを東京に持っていって、自殺する前に壊したのかしら。」
「そうやな。」
「安藤に替え玉がいてもつじつまが合うんじゃない？」
「どういうこと？」
「例えば、ホームレスの男に安藤の振りをさせて歯のレントゲンを撮らせて、その後にその男を殺したらどうかしら？西宮には歯科の記録がないんだし。」

「まあ、それはできるな。遺体は性別の判定も出来ないくらい激しい燃え方だったからな。」
「そこよね。もっちゃん、ウォッカ＆ミドリ下さい。」
「はいよ。」
「だとすれば、リンクしても風景が見えるから話が合うわ。」
「仲間がいるんですよね。」
青木が言った。
「そう、安藤が『考』、『信』、『義』、そしてあと５人。」
「何の集まりだ？」
たかやんがセブンスターをふかした。
「たぶん南総里美八犬伝だと思うのですが・・・。」
「なんやそれ？」
青木とけいは、目をあわせて微笑んだ。
「江戸時代の小説ですよ。仲間が８人いて、頭が伏姫なんです。」
「ふうん。」
「そうだ。初めて病院に行くと、必ず問診票を書くでしょう？その筆跡鑑定はどう？」
「その手がありますよね。明日、朝一に東京から FAX してもらいます。」
「もし、安藤の筆跡と違っていたら、立派な殺人事件よね。あっ。」
けいは頭を押さえた。
（とらえた！神戸の西宮か。）
『信』はにやりとした。
（酒を飲んでいて油断したな。）
「今すぐに安藤の替え玉を行かせた歯科医院に行って、問診票を処分しろ。」
『悌』にメールした。
「替え玉と顔を合わせた医者と歯科助手の記憶を消して来い。」
『仁』にメールした。
「了解。」
と、すぐに２人から返事が来た。
「けいちゃん、大丈夫か？」
「あの男からリンクされたわ。」
「今の話、聞かれたか？」
「たぶん。もっちゃん、お水ちょうだい。」
けいは頭痛薬を取り出して、もっちゃんがくれた水で飲んだ。
「けいちゃん、もう飲むなよ。」
もっちゃんが心配そうに言った。
「けいちゃん、なんでそんなに安藤にこだわるんだい？」
「自分の存在を隠して、何か・・・悪いことをしているみたいなの。仲間の『信』は存在しているけど、

『義』も同じように過去を消し去っているみたい。何かの犯罪グループみたい。」
「でも、東京だよな。管轄か違うから、こっちからは何もできんぞ。」
たかやんはスコッチ・ウィスキーを一口飲んだ。
「そうね、無理よね。」
（『信』をもっとリンクするべきだろうか。）
「もっちゃん、もう帰るわ。頭痛いし。」
「うん、気をつけて帰りなよ。」
「僕、送っていきます。」
青木とけいは店を出た。
「送ってくれてありがとう。」
「途中で倒れないか心配だし。いつからリンクされていたんですか？」
「たぶん、青木さんたちが来てからだと思うわ。声が断片的に聞こえていたかもしれない。」
「筆跡鑑定のことも？」
「うん。」
「この件からは手を引いたほうがいいですよ。けいさん、無理しすぎです。危ないことに突っ込みすぎです。」
「自分でも何でかわかんない・・・。」
「リンクのし過ぎで疲れているんですよ。充分に休んでください。」
「そうね。ありがとう。」
けいがうなだれているので、青木はなんとかしたかったが、何もできることはなかった。
けいのアパートに着いた。けいは下を向いたままだった。
「けいさん、泣いているのですか？」
けいは目をこすった。
「ううん。泣いてないわよ。」
「強がってばかりいてはいけませんよ。」
青木はけいの肩を抱き寄せた。
「あ、すみません。」
慌てて、手を離した。
「大丈夫よ。ありがとう。おやすみなさい。」
「おやすみなさい。」
けいは振り返らず、家に入った。
（つい、肩を・・・。嫌われちゃったかな。）
青木は足早にルイーズに戻った。
翌日の夕方、たかやんから歯科医院の件で新しい情報はなかったと電話がかかってきた。問診票も紛失し、安藤の顔の記憶もなかったという。けいはがっかりした。次に、もっちゃんの携帯に電話した。
「こんにちは。昨日はすみませんでした。」
「けいちゃん、大丈夫？」

「うん。ちょっと１週間ほどお休みをもらおうかと思って。」
「そうしときな。こっちは大丈夫だよ。けど、今日、８時ごろ西が来るけど。」
「そうなんですか？じゃあ、ちらっと顔を出します。」
「うん。待ってるよ。またね。」
カラン、コロンとけいがルイーズのドアを開けた。
カウンターに西がいた。けいは西にもらったネックレスをしてきた。
「こんばんは。」
「いらっしゃい。」
「西さん、ネックレスありがとうございました。」
「けいちゃん、似合ってるよ。」
「何か飲む？酒はやめときなよ。」
「うん。温かいレモネードを。」
「元気なさそうだね。どうしたの？」
西が心配そうに言った。
「ちょっと体調が悪くて。」
「そうか、いい時も悪い時もあるもんな。」
「なんか、自分が非力で・・・。」
「事情はわからないけど、そんなに自分を責めることはないと思うよ。」
「うん、そうね。」
「何か困ってることあるの？」
「事件に首を突っ込みすぎて。」
「何か言われたの？」
「もう、事件には首を突っ込まないほうがいいって。でも、気になるからリンクしちゃうの。そしたら、頭痛がひどくなっちゃって。」
西は１枚の名刺を取り出した。
「何かあったらここに電話してごらん。西の紹介だというと、ただでしてくれるから。」
「え・・・。」
「じゃあね、けいちゃん。もっちゃん、おやすみ。」
「あ、西さん。ありがとう。」
西は会計を済ませて、店を出て行った。
「西さん、どうしてこんなに優しいんだろう。」
「けいちゃんに気があるからさ。」
けいは名刺を見た。
「探偵会社だ。」
「そこの会社、本社が東京だから。」
けいは温かいレモネードを飲み干した。
「西さんの来ること、教えてくれてありがとう。」

もっちゃんにおやすみを言って家に帰った。
家に帰ると敏がチャイを作っていた。
「おかえり。いいタイミングに帰ってきたね。」
「あ、ほんとだ。２人分あるの？」
「あるよ。ちゃんと作ってます。」
敏はマグカップ２つにチャイを注いだ。
「母さん、あの倒れた日から調子悪いね。」
「うん。私が事件に首突っ込みすぎちゃったみたい。みんなに迷惑かけちゃった。」
「僕は母さんがリンクして真実を見てると思ってるよ。」
「ありがとう。」
敏はチャイを持って部屋に戻っていった。けいは１人、キッチンに残りチャイを飲んだ。
（探偵かぁ。確かにこれ以上は警察は調べてくれないし。私、何がしたいんだろうな。なぜそこまで安藤にこだわるんだろう。）
携帯が鳴った。青木からだ。
「もしもし。」
「けいさん、こんばんは。今、電話大丈夫ですか？」
けいはふと、この前青木に肩を抱き寄せられたことを思い出した。
「大丈夫よ。今週はルイーズ、お休みにしたの。」
「そんなに調子悪いんですか？」
「ちょっとね。青木さんも非番？」
「いえ、今夜は夜勤です。今、休憩中ですから。警視庁の鑑識の友達に安藤の件、詳しく調べてもらおうと思ったら、上からそれ以上調べないように言われたらしくて。なんか、怪しいなと思って。」
「え、そうなの？」
「ですから、こちらとしてはこれ以上、けいさんの力になれなくて。」
「いいのよ。ごめんね、せっかく調べてくれたのに。」
「逆に僕は確信しましたよ。何か、西宮で協力できることがあれば言って下さい。」
「うん、ありがとう。」
おやすみを言ってけいは電話を切った。けいは『信』をリンクしてみることに決めた。部屋に戻り、薄暗い照明にして、『信』にリンクしてみた。やはり強い気を感じる。すぐに『信』も気付き、応じてきた。頭痛がしてきた。
（何の用だ？）
けいは無視して、深く入っていった。
（わかった！竹内武。政治家の秘書。）
けいは、すぐにリンクをはずした。これ以上リンクすると、諸刃の剣だ。案の定、『信』はリンクしてきた。けいは必死に心を閉ざそうとした。
（お前のことは大体わかってきたぞ。これ以上、首を突っ込むと殺すぞ！）
最後に強烈な頭痛を残して、リンクをはずしていった。居場所や名前がばれたのかもしれない。

翌朝、西がくれた名刺の探偵会社に電話してみた。西の知り合いだという探偵に、東京に住む政治家の秘書、竹内武について調べてもらうよう依頼した。その日の夕方には、メールで調査結果が来て、プリントアウトした。そして、
さっそく調査結果に目を通した。
平和党、深瀬由美子代議士の第一秘書、竹内武。顔写真も添付されていた。そうだ、この男に間違いない。生年月日、学歴、住所、現在に至るまでの経緯。深瀬代議士の夫の実弟でもある。最後に、余談ではありますがと、断りをいれて、半年前に起きた現官房長官の暗殺未遂事件で、竹内に張り付いているフリージャーナリストの川島という男がいると書かれていた。
（そういえば、そういう事件もあったわね。）
川島の顔写真、連絡先も書かれていた。この川島という男にリンクしてみた。映像が早送りのように見えてくる。聞き込みに歩いている姿。竹内を尾行している姿。彼はこの暗殺未遂事件について、竹内が関与している確信を持って行動しているように見えた。
（この川島という男に連絡を取ってみようかしら。）
けいは連絡先に書かれてあったアドレスに、今までわかっていることを書いてメールしてみた。
数時間後に、返事は来た。内容はこうであった。

はじめまして。フリージャーナリストをしている川島といいます。私は、ご存知のように現官房長官の暗殺未遂事件で深瀬代議士の第一秘書、竹内武を取材しています。取材中なので、詳しくは申し上げられませんが、次期官房長官を狙っている深瀬代議士の第一秘書が暗殺未遂事件の犯人の梅川という男と接触したのではないかという情報を手に入れました。『安藤哲也』という人物は知りません。また、竹内の下に犯罪グループが関与しているのかも知りません。お役に立てず、申し訳ありません。何か情報を手にしたら、お互い情報交換をしませんか？では、失礼します。

けいは早速返信した。

お忙しいのに、お返事ありがとうございます。『安藤哲也』ほご存じないですか。こちらこそ、何かわかりましたら、情報交換しましょう。ありがとうございました。
けいは『梅川』の存在が気になった。しかも、川島はまだ何か隠しているようだった。早々、見知らぬ訳も分からぬ人間に情報をぺらぺらと話すはずがないだろう。けいは、胸騒ぎがした。川島に何か起こるのだろうか。
竹内は川島をリンクしていた。
（そろそろ消すべきだな。）
「今夜、川島、決行。」
実行犯４人にメールを送った。

ここは『考』と『義』がいるマンションの一室である。実行犯の４人も一緒に生活している。
「今夜決行だって。長生きさせてもらったね。」
「そうだね、どうやる？」
「酔いつぶれはどうだい？」

「いいねぇ。」
「じゃあ、用意しましょうか。」
４人は配達人を装って、車に乗り込んだ。川島の自宅に着くと、『礼』は車で待機し、他の３人は川島の部屋に向かった。川島が部屋に不在なのを確認してから慎重に鍵を開け、酒を持って部屋に入った。ドアの鍵を閉め、暗闇の中、川島が帰宅するのを待った。
深夜になり、タクシーから降りた川島は都合のいいように泥酔状態であった。川島が鍵をいつものように開け部屋に入った瞬間に、スタンガンで撃たれ倒れた。バスタブに湯を張り、『悌』と『智』は川島を裸にして、服を脱ぎ散らかして、バスルームに運んだ。バスタブに酒を入れ、川島も湯の中に沈めた。川島はしばらく暴れたが、やがておとなしくなり、バスタブに沈んでいった。酒の空き瓶を転がしておいた。『仁』は川島の持ち物を調べ、何も進展がなかったことを確かめていた。わずか５分程の出来事であった。３人は何もなかったかのように部屋を出て、連絡を受けて戻ってきた『礼』の車に乗り込んだ。
「うまくいった？」
「まあね。」
『仁』は、『信』に終了したとメールした。
翌日、けいはニュースで川島が自宅で亡くなったことを知った。青木に電話して、詳しいことを警視庁の友達に聞いてほしいと頼んだ。青木は快く承知し、すぐに警視庁の鑑識の友達に問い合わせた。
「きのう、私、川島さんと夕方、メールを交わしたのよ。」
「そうなんですか？川島は泥酔したまま風呂に入り、さらに酒を飲んで、バスタブで溺死したようです。アリバイはあるし、胃の中からもアルコールと湯船の水を飲み込んでいたという検死結果が出ています。事故死ですね。」
「そうなんだ。嫌な胸騒ぎがしたのよ。青木さん、調べてくれてありがとう。」
その夜、けいはルイーズにいた。占いも予約制にしてもらい、けいの負担もずいぶん楽になった。今夜は予約が１件入っていて、仕事が終わったがルイーズに残っていた。客はけいしかおらず、相変わらずカウンターの端の席で窓の下の景色を眺めていた。
「けいちゃん、最近、体調はどうだい？」
もっちゃんはグラスを磨きながら話しかけてきた。
「少しづつ、良くなってきてるわ。ありがとう。なんか、私１人で大騒ぎしてたみたい。フリージャーナリストの川島さんが亡くなってから、もう首を突っ込まないようにしようかと思って。」
けいはバラライカを一口飲んだ。
「俺はけいちゃんの見えたことは信じるよ。けいちゃんの能力も知ってるし。」
「ありがとう。自分が感じたことで、なにか重大な事件が起こっていたと考えると怖いわ。」
「そうだよなぁ。」
カラン、コロンとドアが開いて、たかやんと青木が入ってきた。
「いらっしゃい。」
「おう、けいちゃん。久しぶり。」
「こんばんは。」

たかやんがけいの隣に座った。
「最近見かけないと思ったら予約制になったんだって？」
「そうなの。その方がお互い都合がいいし。」
「青木君は何飲む？」
「いつもの温かいレモネードを。」
「あいよ。」
「青木さん、今日は調べてくれてありがとう。」
「いえいえ。」
「何かあったのか？」
「東京のフリージャーナリストの川島という男が事故死したんですよ。」
「例の安藤に関した件か？」
「そうなの。事故死したのはきのう、川島さんとメールを交わした日なの。」
もっちゃんが温かいレモネードを青木の前に置いた。
「また、なにか起こりそうな気がするんだけど、もう首を突っ込まないようにしようかな。」
「そうしたほうがいいよ。でも、何が起こりそうなんだ？」
「政界のバランスがくずれるような。」
「そいつはよくあることさ。気にすることはないよ。」
たかやんはスコッチ・ウィスキーを飲んだ。
「うん・・・。」
「けいさんの予感は当たるから、何か起こるかもしれませんよ。」
「そうだね。たいしたことじゃなきゃいいけどさ。」
「じゃあ、帰ろうかな。」
「おう、気をつけてな。」
「送りますよ。」
支払いを済ませたけいに、青木はついていった。
「もっちゃん、あの２人は付き合っているのかい？」
「さあ、知らないねぇ。」
もっちゃんは知らん顔をした。
「ほんと、寒くなりましたね。」
「そうね、もうクリスマスのディスプレイが始まったわね。」
「あそこの店も電球つけてますね。」
「いい感じね。」
「クリスマスってわくわくしますよね。」
「そうそう、子供の頃から変わらない。」
「最近、頭痛はどうですか？」
「ほとんどなくなったわ。ありがとう。」
「よかった。」

いつものコンビニを曲がった。
「私、本当はまだ安藤の件、納得がいかなくて。しつこいかな。」
「そんなことありませんよ。すべてが上手に出来上がっていますよ。」
「安藤をリンクしてみようかな。」
「また、頭痛が始まりますよ。」
「そうね。送ってくれてありがとう。」
「いいですよ。じゃあ、おやすみなさい。」
けいはおやすみを言って、家に入った。最近、青木のことが気になり始めていた。でも、敏はまだ学生。それに、けいは青木より９歳も年上だ。青木は何年も待つと言ってくれた。まだ、自分の気持ちは抑えておかなければ。
１週間後、現官房長官の不祥事が世間をにぎわすようになった。愛人問題が暴露された。ほどなく、官房長官は辞任が決まり、次期官房長官を決める日になった。第１候補は『伏姫』こと、深瀬由美子議員。初の女性官房長官になるか騒がれていた。第２候補は若手の山岸真一議員。ハンサムで人気があり、今、上昇気流に乗っている。
「うまくいったわ。これで私もやっと官房長官になれるわ。」
「しかし、もっと根回しをしておかないと。」
「わかっているわよ。しっかりしてね。私は新しいスーツを買いに行って来るわ。」
「かしこまりました。」
ご機嫌で『伏姫』は部屋を出て行った。
その日の夕方に新しい官房長官が決まった。街では号外が出て騒いでいる。竹内は賄賂をばら撒き根回ししていたが、総理大臣が選んだのは山岸のほうだった。政界は「若さ」を選んだ。
「なんということなの！なぜ、私が・・・。竹内、どういうことなの！」
「根回しがうまくいかなかったようです。」
「金が足りなかったの？」
「いえ、それは充分に。最終的に総理のほうが若さで山岸をとったようです。」
「今度はなれると思っていたのに。」
「申し訳ありません。次回は必ず・・・。」
「次回はっていつの話になるのよ！もっと金を使いなさい。そのために『考』や『義』がいるのでしょう？」
「はい。」
「あんたの頭の中はどうなっているのよ！最悪よ。つかいものにならないわ！」
「申し訳ありません。」
竹内はひたすら頭を下げた。こんな屈辱感は初めてだった。その夜、竹内は警察官僚の『忠』に電話をした。
「今回の官房長官の任命の件で、『伏姫』に私は大変傷つけられてしまった。」
「しかし、クリーンで若いイメージを持つ若造には負けてしまうだろう。『伏姫』には若さがない。」
「『伏姫』を許せない。」

「落ち着くんだ、『信』。ああいう女だ。騒いで当然だろう。いずれ失敗は取り返せる。」
「ならばいいのだが・・・。」
「私たちは大事な八犬士だ。そう簡単には絆は切れない。ところで、神戸のリンクする女はどうした？」
「最近は、何も感じない。もう、諦めたのだろう。」
「でも、気を抜かぬようにな。では。」
『忠』は電話を切った。
翌朝、けいは朝食を食べ終え、新聞を見ていると官房長官選から落ちた深瀬代議士の写真が、ふとけいの目に留まった。
（この人って・・・。官房長官になれなかったかしら、怒り、焦り、そして失望にまみれているわ。）
けいは、はっと気付いた。
（この人が伏姫だわ！）
すぐにけいは以前、西から紹介してもらった探偵会社に連絡して、深瀬代議士について調査依頼をした。
『信』に気付かれないように、浅く安藤についてリンクしてみた。
（やはり安藤が『考』？）
見ている光景が一致する。『義』とパソコンをはさんで向かい合わせに座っている。どうやら株の取引の画面のようだ。
整理してみた。
伏姫＝深瀬由美子代議士
信＝深瀬代議士の第一秘書、竹内武
忠＝警察官僚
考＝安藤哲也
義＝考と共に株でクリーンな資金を作っている
仁、悌、智、礼＝実行犯
（こういうメンバーなのね。）
その日の午後、探偵会社に依頼していた深瀬代議士に関する調査結果がメールで届いた。メールを読んでいくと同時にリンクが行われていった。
（やっぱり、前官房長官暗殺未遂事件に関与しているみたい。『信』に命じているわ。官房長官になり、初の女性総理大臣の座を狙っている。相当、お金をばら撒いているみたい。やり方が汚いわ。川島さんはやはりこの件を追っていたのね。暗殺未遂の事件の犯人、梅川は・・・『仁』？に催眠術をかけられ、最後の一発で自殺したみたい。『仁』は催眠術が使えるのかしら。でも、」これ以上は『仁』の心は読めないわ。）
けいはコーヒーを入れた。ふいに、携帯が鳴った。青木からだった。
「もしもし。」
「けいさん、こんにちは。今から時間あります？」
「何も予定はないわよ。今日は非番なの？」

「そうです。気分転換に、バイクにでも乗りませんか？」
「いいわね。ちょうど話したいこともあったし。」
「じゃあ、３０分ほどしたら行ってもいいですか？」
「うん、いいわよ。」
電話を切った。バイクに乗るかっこしなきゃ。ジーパンに履き替え、化粧をした。なんか、ワクワクしてきた。青木に会えるのが嬉しいのかな。家にいても考えが煮詰まっちゃうし、いい気分転換になるかな。
３０分ほどすると、バイクの音が聞こえてきて家の前に止まった。ピンポーンとチャイムが鳴った。
「こんにちは。急に誘って、すみません。」
ドアを開けると、ライダージャケットを着た青木が立っていた。いつものスーツ姿とは違う青木にどきっとしてしまった。
「ジャケット、少し大きいかもしれないけど、着てください。寒いですよ。」
「ありがとう。」
けいは受け取り、はおった。
「どこか行きたいところありますか？」
「ん～、ちょっと遠いかもしれないけど、北の方の白水峡霊園に。」
「お墓参りですか。白水峡霊園なら近いですよ。行きましょうか。」
けいは鍵を閉めて、外に出た。
「これ、ヘルメットとグローブです。」
「もしかして、これ新品なの？」
「けいさん用ですよ。」
青木はけいのヘルメットの首紐をロックした。
「ごめんね、ありがとう。」
「バイク、初めてですよね。」
「うん、ちょっと怖いわ。」
「しっかりつかまってくれてたら、大丈夫ですよ。」
青木がバイクにまたがった。けいもバイクに乗り、遠慮がちに腕を回した。
「もっとしっかりつかまっていいんですよ。」
けいはしっかり青木につかまった。
「じゃあ、行きますよ。」
青木はゆっくりと走り出した。中津浜線に出て、北上していく。最初けいは怖くて全身に力を入れていたが、小林を過ぎた辺りから徐々に力が抜けていった。青木の運転に身を任せて走っていく。風は冷たいが、何か暖かい感じがした。気持ちがいい。やがて、逆瀬川を上り、山に入っていった。山に入ると気温がグッと下がる。トンネルを抜けると雪がちらついていた。山道に入り、カーブが多くなる。体を青木と同じように倒して走っていく。やがて、白水峡霊園に着いた。
「お墓はどこですか？」
青木は振り返った。
「最初の角を右に曲がって、そのまま突き当りまで。」
「了解。」

バイクは再び走り出し、けいの言ったところにあった駐車場にバイクを止めた。けいはバイクを降りて、その場に座り込んでしまった。青木もヘルメットをはずし、けいの隣に座り、ヘルメットをはずしてあげた。
「緊張した？」
「うん、すごく緊張したー。」
青木はそんな着飾らないけいが好きだった。けいと青木のヘルメットをハンドルにかけた。
「ありがとう。おじいちゃんのお墓なの。車がある頃はよく来てたんだけどね。」
２人は歩き出し、階段を下りた。
「いい景色ですね。」
「うん、ここは見晴らしがいいの。ここよ。」
けいはお墓の雑草を抜き始めた。
「有馬温泉に行くときはこのルートを通るけど、通り過ぎるだけだったし。」
青木も雑草を抜いた。
「私、昔、有馬温泉で働いていたのよ。」
「ホテルでですか？」
「ううん。お土産やさんで。」
けいは手を合わせた。青木も手を合わせた。
「ありがとう。ずっと、来てなかったし、安心したわ。」
「どういたしまして。」
「バイクって楽しいね。」
「楽しいでしょう。天気のいい時は、署に行かないで、このままどこかに走りに行こうかと思いますよ。」
「そうね、私も車に乗って通勤しているときそうだった。」
「でしょ。何か、僕に話しがあるっていうのは？」
「あ、そうそう。家に資料があるの。今夜、夕飯をご馳走するから家に来て。」
「いいんですか？」
「うん、ぜひ。」
「じゃ、お言葉に甘えて。」
２人はバイクのところに戻っていった。
「この資料はどうしたんですか？」
竹内と深瀬の資料を読みながら、青木は言った。
「西さんの知り合いの探偵会社を紹介してもらったの。東京にもあるらしくて。」
けいは、コーヒーを出した。
「この竹内という男がリンクできるの。頭痛を起こさせる人よ。」
「この暗殺未遂事件は、犯人が自殺した世間を騒がせた事件ですよね。」
「実行犯の『仁』が催眠術をかけて、最後に自殺するように仕向けたみたい。」
「確かにあの死に方は、普通じゃないですよね。」
「実行犯の４人は心を閉ざしていて、ほとんどリンクができないのよ。死んだ心みたい。」

「そうなんですか。」
「すべて証拠がないから、どうしようもないわ。」
「公安が動いているかもしれません。」
「そうかぁ。こちらからは何もできないわね。」
「そうですね。任せといて大丈夫ですよ。へたにけいさんが首突っ込んだら、また何されるか分からないし。」
「時には諦めも必要かな。」
「ただいま。」
敏が帰ってきた。
「やっぱり青木さんだ。バイクが止まってたから、そうかなって思った。」
「おじゃましています。」
「今日はおじいちゃんのお墓に連れて行ってもらったの。」
「そうなんだ。」
「夕飯をご馳走しようと思って。」
「何にするの？」
「お鍋よ。」
「あ、いいですね。鍋は久しぶりだなぁ。」
けいは支度を始めた。
「手伝いましょうか？」
「ありがとう。じゃあ、お願いします。」
その夜は楽しく過ごせた。敏も安心して、青木の姿を見つめた。
（青木さんなら、母さんを幸せにしてくれるかな。）
青木が帰ってから、けいは敏とお茶を飲みながら話した。
「母さん、僕、青木さんとなら再婚反対しないよ。」
「まだ、付き合ってもいません。」
「でも、両想いだと思うよ。」
「そうかな。敏が賛成してくれるなら嬉しいけど。でも、その前に敏の就職と高校卒業があるでしょ。」
「はいはい。じゃあ、お風呂に入ってくるね。」
けいは敏が青木のことを気に入ってくれているのが嬉しかった。
翌日の夜、早い時間にけいはルイーズにいた。
「久しぶりだね、けいちゃん。最近はどうしてたの？」
もっちゃんがバラライカを出した。
「青木さんとデートしたの。」
「おっ、いい展開じゃないか。」
「青木さんの気持ちがよくわかるわ。」
「リンクしたのかい？」
「してないけど、女の勘？敏は賛成してくれているの。」

「敏君が賛成してくれるならいいじゃないか。けいちゃんはどうなの？」
「正直言って、好きよ。とても優しいし、守るっていう気持ちはあるし。でも私のほうが９歳も年上だわ。もっと若くて青木さんにふさわしい人がいるんじゃないかと思うと。」
「年の差は関係ないよ。俺の彼女だってけいちゃんと同い年だろ。子供は考えてないし、結婚もまだ考えてないさ。」
「私よりももっちゃんが先に結婚しなきゃ。」
けいがやっと笑った。
「最近、頭痛はどうだい？」
「おかげさまで治まっているわ。ありがとう。」
けいはバラライカを飲み終えた。
「西さんは元気？」
「最近は忙しいみたいで、ぜんぜん来ないよ。前、西もけいちゃんのこと聞いてたよ。」
「そっかぁ。なんか複雑。」
「西は誰とも結婚しないよ。」
「どうして？」
「あいつの家庭環境にせいかな。まぁ、本人も言ってたしな。」
「何か他の人と違う雰囲気を持っている人だと思っていたわ。」
「よくぐれなかったと思うよ。」
「真面目だもんね。」
カラン、コロンと数人の客が騒がしく店に入ってきた。
「いらっしゃいませ。」
もっちゃんは客のほうへ行った。けいは代金をカウンターの上において、またねと言って店を出た。
数日後、けいの手元に速達で書留が届いた。お呼び出しだった。けいは数日用の荷物をスーツケースに入れ、準備をした。明日の新幹線のチケットである。
「ただいま。」
敏が帰ってきた。
「敏、また急だけど東京にいくことになって、数日家を空けるけど大丈夫？」
「いつも急だね。僕は大丈夫だよ。」
「おかずも作っといたし、ご飯だけ炊いてね。」
「母さんも何かと忙しいね。」
「もし、私がいない間に誰かから連絡来ても、占いの研修にいっていると言っておいてね。」
「いつも通りでしょう。大丈夫。」

翌日、朝一番の新幹線に乗り、東京へ向かった。スーツを着たけいは警視庁内の小さな会議室にいた。公安の係りの者が２人、けいの前に座っていた。けいは公安の情報屋としても働いていた。年に数回、今回のように突然呼び出され、何か事案がないかリンクさせられる。
「今回、問題提起したいのは、前官房長官の暗殺未遂事件です。私の見たところ、９人がこの事件に関わっています。里見八犬伝からヒントを得たのでしょう。それぞれ伏姫、考、義、信、忠、悌、仁、智、

礼として役割を持っています。今のところわかっているのは、伏姫は深瀬由美子代議士、信は深瀬代議士の第一秘書の竹内武。考は兵庫県出身の焼身自殺を図ったとされる安藤哲也、義は不明。この２人は株でクリーンな資金を稼ぎ、現金化し、一部をペーパーカンパニーにばら撒いているようです。忠は警察官僚。残りの４人は金で雇われた実行犯です。中でも仁と呼ばれる人物が催眠術を使えるようです。前官房長官暗殺未遂事件の犯人、梅川に催眠術をかけ、最後に口封じのために自殺するように仕向けたようです。」

「うむ・・・。」

公安捜査官は顔を見合わせた。

「実は君以外にも、この件に関してリンクしてきたものがいる。君より内容は詳しくはないが、確かに１人警察関係者がいると言っている。何か資料を渡したらわかるかね。」

「顔写真を見たらわかるかもしれません。」

もう１人の公安捜査官が資料の入った封筒を差し出した。

「何人か候補がいる。この中から捜してくれ。名前が知りたい。今日この部屋を使っていいので、出来るだけ早くリンクしてくれ。」

「わかりました。」

２人の捜査官は部屋を出て行った。

けいは封筒の中から資料を取り出して、読み始めた。梅川の事件について、詳細に書かれていた資料があったが、催眠術にかかっていたとは書かれていなかった。フリージャーナリストの川島の件の資料もない。けいはそれらのことをパソコンに入力し、昨夜、東京に来る前に再度リンクした今回の結果もあわせて入力した。そして、ピックアップされた十数人の警察官僚の資料に目を通し始めた。

（忠はとても慎重だわ。上手に身を隠している。なかなかわからないわ。この同じ建物の中にいるはずなのに。）

この公安の仕事はけいが２０代の頃からしている。リンクできる人間を察知できる能力を持つ公安の捜査官が、リンクできるものを全国から探し出し、充分な身元調査をして、問題がなかったらそれとなく勧誘する。そして、再度、心を読めるリンクの能力を持つ捜査官が試験、面接する。お互いリンクできるもの同士の情報は交換しない。採用されるのも数年に１人いるかいないかだ。身分は警視庁公安課に所属する。それぞれの能力が違い、差がある。けいはよくできるほうだ。

けいは一旦、忠のリンクを諦めて、自分のパソコンから東京の探偵社に調べてもらった資料を転送した。

（そろそろお昼ね。）

けいは時計を見て、食堂に向かう準備をした。パソコンの電源を落とし、部屋の鍵をかけ、食堂に向かった。

（忠は今、この建物の中にいる・・・。１２階？）

けいはとりつかれたように、１２階のエレベーターのスイッチを押した。一緒に何人か乗り込んできた。

（１２階には何があるにかしら？）

１２階に着き、けい１人が降りた。

（組織犯罪対策部・・・。）

けいは思うままに歩いてみた。今は昼食時間なので、廊下を歩いている人は少ない。奥に歩いていく

と、会議室のドアが開き、数人が談笑しながら出てきた。
　けいの心臓がきゅっとした。
　（この中に忠がいる！）
　はっと顔を上げ、忠の顔を確認した。向こうもチラッとけいの顔を見た。
　（この人が忠だ。）
　けいは軽く礼をして歩いていった。彼らはエレベーターの方へ歩いていった。
　（見つけた。）
　けいは角を曲がって隠れ、彼らがエレベーターに乗り込むのを待った。彼らが出てきたのは会議室のようだった。けいは再びエレベーターに乗り、先程の小会議室に戻った。公安が用意してくれた資料の中に、警視庁の警察官僚の顔写真入り資料を見直した。
　組織犯罪対策部部長　大野　誠
　（この男だわ。部長が関わっているなんて・・・。）
　忠の心にリンクしてみるか迷った。昨夜、信を除いてリンクしてみた時は、信に逆リンクされなかったのでよく見れた。
　（東京でリンクしたら信にすぐに見つかるかしら。忠をどうやって仲間に引き入れたのかしら。）
　けいは昨夜気付いたが、相手の寝ている時にリンクしたら、本人に気付かれることなくリンクが深く出来るようだ。東京に来る前に『仁』をリンクしてみたら、以前より少し深くリンクできた。
　（今夜もやってみよう。）
　けいは遅い昼食をとりに、部屋を出た。

　その頃、深瀬代議士は竹内と深瀬代議士の自宅で昼食をとっていた。
　「竹内、私は今度こそ次の官房長官になれるかしら。」
　「忠から現官房長官のマネーローダリングや女性関係について調べてもらっています。マネーローダリングの件に関しては時期が来たら情報を流します。」
　「マネーローダリングねぇ。　皆がやっていることだわ。もっと、決定的な何かを・・・。」
　「この前、他の者にリンクされました。」
　「いつ？」
　「現官房長官に決まったときです。伏姫の念が強かったからでしょう。あまり深くはリンクされませんでしたが。」
　「私たちのことがばれたの？」
　「いえ、大丈夫です。一回きりでしたから。人物も特定できませんでした。」
　「神戸の女はどうなったの？」
　「最近は動きがありません。」
　「そう、それならいいわ。さあ、委員会に行きましょうか。」
　けいは『忠』が大野だということを公安の捜査官に告げて、以降の捜査は公安に任されることになった。明日は事後処理をするように言われた。夜、夕食をとり、東京に来た時には必ず立ち寄るショットバーへ向かった。途中、敏に電話した。
　「敏、そっちは大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。母さんは？」
「私も大丈夫よ。帰りは明日遅くか、あさっての午前中になりそう。また、連絡するわ。」
「わかった。仕事頑張ってね。」
「ありがとう。おやすみ。」
「おやすみなさい。」
ショットバー「ドアーズ」に着いた。ドアを開けた。
「こんばんは。」
「こんばんは。久しぶりですね。お仕事ですか？」
けいはカウンターに座った。
「そうです。年に数回しか東京に来ないけど、いつもよく覚えていてくれますね。」
「こちらでお仕事があるときは、毎日来てくれるでしょう。バラライカでいいですか？」
「ええ、お願いします。」
「通われて１５年くらいになりますね。すっかり常連さんですよ。」
「ありがとうございます。」
「子供さんも大きくなったでしょう？」
「ええ、もう高校生です。」
バーテンダーがけいの前にすっと、バラライカのロックスタイルを出した。
「どうぞ。もう高校生ですか。」
「あっという間です。」
新しい客が何人か入ってきたのでバーテンダーはそちらの方に行った。
（明日まとめて報告しなきゃ。今夜も徹夜ね。若い頃は平気だったけど。）
けいはバラライカを飲みながら、報告書に書くことを整理した。早く切り上げようとしたが、結局、バラライカとソルティードッグを飲んで店を出た。ホテルに戻った頃は２４時を過ぎていた。シャワーを浴びて、一息つき、帰りにコンビニで買ってきた水を飲んだ。いすに座って、リラックスした状態になり、伏姫からリンクしてみることにした。伏姫はもう眠っているようだった。
（ああ、官房長官から総理になりたがっているのね。また、現官房長官を引きずり落とそうとしているわ。また、暗殺計画を立てた時に警察の人間が必要だったのね。）
けいはメモをとりながらリンクした。信も眠っているようだ。浅くリンクしてみる。
（『信』は裏切り者だわ。伏姫を手助けするように見せかけて、自分が議員になろうとしている。・・・・寝る前、実行犯らに伏姫を殺すよう指示している！伏姫が危ない！）
『信』はリンクされていることに気付き、飛び起きた。けいをリンクした。けいも逆リンクされたことに気付いたが遅かった。以前のように、強烈な頭痛に襲われ、意識を失った。
その頃、既に４人の実行犯は深瀬代議士に住むマンションの部屋の前にいた。預かった鍵でそっと部屋に入った。
すぐに、深瀬の飼っている犬が来たが、スタンガンで撃たれ、倒れた。深瀬は１人暮らしだ。寝室の場所もわかっている。音もなく寝室に入り、寝ている深瀬を仁が起こした。
「お前は、『仁』。どうやってここに・・・。」

「これを飲むんだ。」
仁は深瀬に暗示をかけた。深瀬は命令通り、ウィスキーと大量の睡眠薬を飲んだ。そして、クロロフィルをかがせ、眠り込んだ深瀬を清掃用の大きなカートに入れ、上からカバーでかぶせた。テーブルの上に深瀬の指紋をつけたウィスキーのビンと、大量の睡眠薬の空のシートを置き、部屋を出た。そのままマンションの屋上３０階に上り、深瀬を突き落とした。４人は誰にも気付かれることなく、すぐに清掃社用の車に戻りマンションから立ち去った。わずか１５分の出来事であった。
翌日、警視庁は騒がしかった。深瀬代議士の自殺。けいはきのうの小会議室で２人の公安と話していた。
「竹内をリンクしていたところ、深瀬を殺すよう指示したのがわかったんだな。それから、竹内に逆リンクされ、意識を失わされた・・・と。」
「はい、そうです。間に合いませんでした。４人の実行犯に命じていたようです。竹内は議員の座を狙っています。もし、竹内が議員になったら大野がさらに上の幹部になれるよう働きかけるようです。」
「実行犯がどのような人物かわかるか？」
「彼らをリンクしようとしても、心を閉ざしていてあまり出来ません。」
「そうか。なにか他にわかったら、すぐに連絡するように。もう、戻っていい。」
「わかりました。では、失礼します。」
けいは２人に礼をして、部屋を出て行った。

ホテルに戻り、帰り支度をしていると携帯が鳴った。青木からだった。
「もしもし。」
「けいさん、今、いいですか？深瀬代議士が自殺したって聞いて。」
「そうみたいね。ニュースで見たわ。」
「例の安藤っていう男と関係があるのかなって思って。」
「ごめんなさい。今、ゆっくりと話できなくて。今夜、ルイーズで会えるかしら？」
「今夜、大丈夫ですよ。忙しいところすみません。」
「じゃあ、今夜、ルイーズで。」
「わかりました。では。」
（青木さんには話してもいいのかな。・・・やっぱり、だめだわ。）
けいは荷物を持ってホテルを出た。
深瀬代議士の事務所はマスコミの応対に追われていた。竹内は深瀬が最近、ノイローゼ気味だったことを話した。かなり沈んだ表情をしていたが、内心計画通りにことが進んでいるので喜んでいた。
「私は亡き深瀬先生の遺志を継ぎ、次の選挙で立候補します。地元の皆様に安心して生活していただくよう努力します。」
竹内はマスコミの前で号泣した。
「かなり、演技派だね。」
テレビで見ていた悌たちが笑った。

仁は立ち上がり、義と考に声色を変えて言った。
「二人共、今までやつらのペーパーカンパニーにばら撒いた金を集めて、すべてこの口座に振り込むんだ。２時までに出来るな。」
仁は２人に暗示をかけた。
「はい、出来ます。」
義と考は答え、指示通りスイス銀行の口座に今までの株取引で得た利益１２億円を振り込む作業を始めた。
「昼飯食ってる間に出来るっしょ。じゃあ、食料調達に行ってくるわ。」
礼が部屋を出て行った。
１時過ぎにはスイス銀行の口座に全額振り込まれた。
「終わったねぇ。」
悌は満足そうにいった。
「じゃあ、片付けましょうか？」
「そうだな。パソコンンを忘れないようにな。」
４人は義と考を車に乗せて、港の倉庫まで連れて行った。４人のアジトだった。義と考に薬をかがせ、意識を失わせてから、ドラム缶に入れられコンクリートを流し込んだ。
「コンクリが固まったら、海に捨てよう。悌はパソコンの処分をしてくれ。」
「了解。」

けいは夜の７時過ぎに新大阪に着き、すぐに青木の携帯に電話した。
「けいです。今朝はばたばたしててすみませんでした。」
「こっちこそ、すみませんでした。」
「もうルイーズにいるの？」
「いえ、まだ署です。ちょっと手間取っちゃって。今、出れますから。」
「私、今新大阪なの。私も今から行くから。」
「了解です。たかやん先輩も呼びますか？」
「悪いけど、青木さん１人で来てくれない？」
「わかりました。では、後で。」
「じゃあ。」
けいは急いで大阪駅に向かった。
カラン、コロンとドアを開けけいがルイーズに入ってきた。もう、青木はきていた。
「こんばんは。ごめんね、お待たせ。」
「大丈夫ですよ。さっき来たところですから。」
「そっか、よかった。もっちゃん、カンパリソーダを。」
「けいちゃん、落ち着いてから飲んだほうがいいよ。夕飯まだなんだろう？悪酔いするよ。ジンジャエールにしときな。スナック菓子ぐらいしかないけど、少しは食べなよ。」
「ありがとう、もっちゃん。」
「あ、敏に電話してくるわ。」

「けいちゃん、忙しそうだね。」
「そうですね。」
ばたばたと、けいが階段を上ってきた。
「これで、一安心。」
けいはジンジャエールを飲んだ。もっちゃんは他のお客のところに行った。
「青木さん、心配かけちゃってごめんなさい。深瀬代議士の自殺には驚いたわ。」
「今日、うちの署でも話題でしたよ。ウィスキーと睡眠薬飲んでたとはいえ、３０階から飛び降りですからね。処理が大変だっただろうって。」
「そうね。青木君の本庁のお友達は何か言ってきたの？」
「電話がかかってきて、公安が動いているみたいだって。内部に関係者がいるのかな。けいさん、実は・・・。」
青木はうつむいた。
「どうしたの？」
「けいさん、本当は占いの研修にいってたんじゃなかったんでしょう？」
「えっ。占いの研修よ。」
「そう答えないといけないのわかります。でも・・・。実は僕も、先月東京に行ってたんですよ。」
「お友達に会いに？」
「いえ、呼び出されたんです、といえばわかりますか？僕をリンクしてみてもいいんですよ。」
気がつくと、病院らしいき部屋で点滴をしていた。真っ白な天井。ふと、横を見ると、敏と青木がいた。
「母さん、気付いた？」
「ここは？」
「中央病院だよ。」
「私、どうして？」
「ルイーズで倒れたんですよ。」
青木は優しく言った。
「今、何時？」
けいは起き上がろうとした。
「母さん、起きちゃだめ。」
敏がけいを寝かせた。
「今、朝の９時ですよ。」
「私、どうしたのかしら。ルイーズ行って、青木さんと話してて・・・。」
「僕が悪いんです。驚かせてしまったから。でも、決まりだったから話せなかった。」
けいは黙って青木の話を聞いた。
「おととい、けいさんの家に行ったんですよ。敏君が１人でいて、けいさんは？って聞いたら、占いの研修で東京に行っていると。けいさんレベルの人が研修っておかしいなと思って、ついリンクしてしまったんです。」
「つまり、青木さんってリンクができるの？」

「少し・・・。」
けいは、ため息をついて天井を見上げた。
「でも、リンクできるもの同士は告白してはいけないのよ。」
「そうなんですが。僕はけいさんみたいにリンクできる能力持ってないし。」
けいの目から涙がこぼれた。
「私、辛かった。こんな能力持ってなかったら、どんなに楽だろうって。いつも一人ぼっちだった。」
「僕もそうですよ。」
けいは青木を見た。
「辛かった・・・。」
「もう１人じゃないですよ。」
青木はけいの手を握った。
「僕は高校生の時、公安から勧誘されて採用されたんです。僕は人の心を読むより、物についた人の心を感じ取れる能力なんです。だから鑑識で力を発揮できるだろうと。」
「私は対面で占い師をしている時に勧誘されたわ。２４歳のときよ。」
「リンクが出来るもの同士がつながったら、大変なことになるからお互い言っちゃいけないけど。そういう決まりだけど、僕たちは出会ってしまった。」
「他にリンクできる人は感じる？」
「竹内だけですね。」
「私もそう。この能力を悪用したら気付くもの。竹内の力は強いわ。いろんなリンクの力を持っているわ。」
「今度の夏の選挙に出るみたいです。当選するでしょう。あんな力を持ったやつが政治家になったら危ない。」
「そうね、でも立ち向かうと殺されるわ。あ、そうだ。忠で警察官僚の仲間がいたでしょう？大野っていう組織犯罪対策部長だったわ。竹内が政治家になったらもっと上の身分を保証する代わりに仲間になったみたい。」
「僕がリンクできた人だ。テロ関係の人だよ。」
「リンクしたのって青木さんだったの？竹内が当選するのを何とか阻止したいけど、どうしたらいいかわからないわ。」
公安の方では、竹内と大野がホテルで密会していた情報を得ていた。しかし、はっきりとした証拠がない。最近では会わないようにしているし、密会していたという情報もまだ深瀬代議士が生きていたころの話だ。通信記録も消されていた。青木は東京に呼び出された。青木のリンクによると、手紙でやり取りをしているようだ。
「普通通便で読んだ後、燃やしてしまえば証拠は残りません。でも、その灰だけでも手に入れば、私はリンクできます。」
「灰かぁ。難しいな。」
公安のものが言った。
「よし、大野宛の手紙を全部チェックしよう。しばらくは東京にいるように西宮署のほうには指示を出し

ておくからな。」
「わかりました。」
その日から青木は大野宛に届いた郵便物を触って、全部チェックするようになった。
竹内は夏の選挙で当選していた。既に、仁に邪魔になった大野を殺すよう指示を出していた。

２日間、何事もなく終わった。３日目、青木が竹内の後援会からきた怪しい手紙を見つけた。リンクしてみると、パーティーへの招待状だった。他に怪しいことは書かれていなかったが、何か感じ取ったので公安に伝えておいたほうがいいと思い、公安の部屋まで行こうとした。大野への手紙は、係りのものが受け取りにきた。いつも時間がかかるので急いでいた。

バン！
という銃声が１２階で響き渡った。１２階にいた係りのものが悲鳴をあげた。
大野は仁に暗示をかけられていた。パーティーの招待状が届き、見るのと同時に自分の口に銃口を加え引き金を引いていた。
すぐに公安にも連絡が行き、大野が自殺を図ったことを知らされた。
「間に合わなかったか！」
公安の部長が机を叩いた。青木はうなだれた。
「青木君、君に落ち度はない。こうやって、知らせてくれたんだからな。」
「もう少し早く、部屋に来れたら防げたかもしれません。」
「いや、中身はただのパーティー券だ。証拠にはならん。自殺するような指示は書かれていない。係りのものにもわからなかったはずだ。後の処理は我々がする。ご苦労だったな。」
「お役に立てず申し訳ありませんでした。」
青木は一礼すると、部屋から出て行った。警視庁を出ようとするとき、携帯が鳴った。けいからだった。
「もしもし。」
「青木さん、さっき大野の気配が消えたけど、もしかして・・・。」
「さっき、自殺したよ。」
「・・・。間に合わなかったみたいね。」
「うん。」
「仁が暗示をかけたみたい。」
「今から帰ります。」
「もしよかったら、私の家に寄って。」
「はい、行きます・」
「青木さんのせいじゃないわ。あまり自分を責めないで。」
「ありがとう。じゃあ。」

竹内は大野の気配がなくなり、死んだことを確信した。
（これで私の天下だ。）
議員室で竹内は一人笑った。
ピンポーンとチャイムが鳴り、けいは急いでドアを開けた。暗い表情の青木がいた。

「どうぞ。」
「おじゃします。」
けいはなんと声を掛けたらいいかわからなかった。青木の心の中が丸見えですごく辛い。今は何も話したくないようだ。
「チャイを飲んで。」
「これから竹内は何をするんでしょうか？」
「わからないわ。彼をリンクするのは危険なの。もう、西宮まで場所がばれているから。あの４人を送り込まれたら最後よ。」
「そうですね。」
けいはチャイを一口飲んだ。
「でも、あの４人は竹内に何も忠誠心がないわ。ただお金でつながっているだけ。お金を積んだら竹内だって殺すわ。」
「竹内はあの４人をリンクできるんじゃないですか？」
「たぶん、無理だと思うわ。あの４人は特別よ。ある意味リンクができるというか心を閉ざすことができるの。だから、私もリンクしづらいわ。」
「この先、どうなっていくんだろう。」

また、ハロウィンの季節になった。
「青木君、元気になったね。」
もっちゃんが言った。
「そうですか？あの大野の件ではかなりへこみましたからね。ジムでかなりストレス発散しましたよ。」
青木は温かいレモネードを飲んだ。
「そうやな、ジムばっかり行ってたな。」
たかやんが言った。
「竹内は官房長官に異例の抜擢。今のところ、それくらいしか悪さはしてないみたいね。でも、油断できないわ。」
けいはバラライカを飲んだ。
「やっぱり総理を狙ってますよね。」
「そうだと思うわ。リンクできるから出世は早いわ。あんな人が総理になったら日本も終わりだわ。」
「どのみち、日本なんかだめさ。」
たかやんはたばこをふかした。
けいは急に頭痛がしてきた。
「ちょっと失礼。」
けいはトイレでしゃがみこんだ。竹内がリンクしてきている。心を必死で閉ざそうとした。
（西宮の女。聞こえるか？明日、１５時に東京、日本橋にあるセントラルホテル３０３号室に来るんだ。誰にも言うな。さもないと、大事な息子の脳を破壊するぞ。）
メッセージは２回繰り返され、リンクが切れた。けいはしばらくしてトイレを出た。
「けいちゃん、大丈夫？」
もっちゃんが心配した。

「ちょっと飲みすぎたみたい。」
「わかった。気をつけてな。」
「僕、送っていきますから。」
青木も心配して、けいと店を出た。
「リンクされたんですか？顔色悪いですよ。」
「本当に飲みすぎちゃったみたい。さっき、トイレでもどしたから、ましになったわ。」
「家までもちそうですか？」
「大丈夫よ。」
けいの家に着くと敏が出てきた。
「母さん、大丈夫？顔色悪いよ。」
「ちょっと飲みすぎたみたいだよ。」
「青木さん、ありがとう。」
「じゃあ、おやすみ。」
２人は家に入っていった。青木はけいの触ったドアノブにそっと触れ、リンクした。
「母さん、お水飲んで。」
敏はコップに水を入れ、けいに渡した。
「敏、明日、東京に行ってくるわ。最終の新幹線には乗れると思うけど。学校終わったら直接、たかやんのところに行きなさい。」
「わかったけど、どうして？」
「訳は聞かないで。とにかく、気をつけて、すぐにタクシーに乗っていくのよ。」
「うん。」
「もう、寝なさい。」
「おやすみ。」
敏が部屋に戻っていくと、けいは竹内からのメッセージにあったホテルの名前とルームナンバーをメモした。
（罠だわ。でも、行かないと。）

東京に着くと雪がちらついていた。今は、午後２時半過ぎ。タクシーに乗って、セントラルホテルに着いた。けいは直接３０３号室に向かおうと、エレベーターに乗ると、１人の男も乗り込んできた。仁だった。けいは、はっと気付くと腕をひね上げられ、３階のフロアで降りた。腕をひねられたまま、３０３号室に無理やり押し込まれた。
「手荒なまねをさせて悪かった。」
高級なスーツを着た竹内が待っていた。
「あなたが竹内ね。」
けいはにらんだ。
「気の強い女だな。まぁ、リンクした時にわかってはいたがな。」
「他の３人は？」
「彼らはここにはいない。君を殺すには仁１人で充分だからな。」
「殺す？」

「そう、仲間に入らなければね。」
「仲間？」
「君ほどのリンクの持ち主ならば、私と手を組めば日本はおろか、世界も手に入るだろう。どうだ、手を組まないか？」
「お断りよ！」
仁は腕を強くねじった。
「うっ。」
けいはうめいた。
「手荒いまねはしたくない。素直になりたまえ。この力、世界に通用するんだぞ。」
「私は世界なんて興味ないわ。」
「じゃあ、これならどうかな。大切な敏君をリンクしてごらん。間に合わなかったようだね。」
「えっ。」
けいは敏をリンクした。車の中だ。後部座席に座らされ、拘束されている姿が見えた。間に合わなかった。
「敏・・・。卑怯者！」
「意味がわかるな。君が納得した上で仲間になるんだ。仲間にならないと敏君の命はなくなるよ。」
「わかったわ。敏をすぐに解放して。」
「いや、まだだな。」
「本当よ。本当に仲間になるから、敏には手を出さないで。」
「いいだろう。」
竹内は携帯で智に連絡した。
「離してやれ。」
敏は車内から、道路に投げ出された。
「気が変わったら、どうなるかわかってるな。」
けいは竹内を睨みつけた。
「私はどうしたらいいの？」
「そうそう、素直になってくれればいいんだ。この書類にサインしたまえ。」
竹内は一枚の書類をけいに渡した。
「これは。」
「それは見ての通り、婚姻届だ。私の妻となり、世界を回るのだ。」
「そんな。」
「これで計画通りことが運ぶ。サインするんだ。」
「わかったわ。手を離して。」
仁はけいの腕を離した。けいは一呼吸置いてから、書類にサインした。
「よし、いい子だ。」
仁は書類を受け取って、部屋を出て行った。エレベーターに乗り、地下の駐車場に降りて、車のドアを開けた。その瞬間、後頭部を殴られ意識を失った。青木だった。昨日、リンクした時に気付き、けいのあとをつけてきた。敏のことはたかやんに任せていたが、智のほうが先に敏を捕まえた。青木は手錠で仁

の手を車のハンドルにつなげて、婚姻届を破り捨てた。青木は急いで３０３号室に向かった。
　その頃、けいは安心しきった竹内について部屋を出て行った。ホテルの前に止めてあった公用車に乗り、議員宿舎へ向かった。青木が３０３号室に着いたときには、２人はもういなかった。青木は床を触って、リンクした。
　（議員宿舎に向かった。）
　青木は一階に降り、タクシーに乗って議員宿舎へ向かった。
　竹内らが先に議員宿舎に着いた。
　「しばらくここで生活してもらうよ。」
　竹内の部屋に連れてこられた。
　「少しでも反抗的な態度を取ると、敏君が危ないよ。」
　「わかってるわ。」
　「ここでおとなしくしてろ。私は夜まで委員会にいってくる。」
　けいはうなずいた。竹内は満足そうに出て行った。

　１５分ほどたった頃だろうか、けいがどうしようかと考えていると竹内の部屋のドアを叩く音が聞こえた。けいはそっとドアを開けた。青木だった。けいは抱きついた。
　「どうやってここが・・・。」
　「後で。とにかくここから抜け出そう。」
　「私が逃げると敏が危ないの。」
　「敏君なら大丈夫。」
　青木は敏の定期入れを見せた。
　「これは敏の定期入れ。」
　「これをもっている限り大丈夫。今はたかやんと西宮署にいるよ。」
　「よかった。」
　「行くよ。竹内は？」
　「委員会に行ってる。夜までは帰らないわ。」
　「仁は？智は？悌は？」
　「仁は捕まえて、公安のものに連絡してある。智と悌は、もう東京行きの新幹線に乗ってる。こっちも公安に連絡してるから途中で逮捕されているだろう。」
　「じゃあ、婚姻届は？」
　「僕が破り捨てたさ。」
　「よかった。」
　２人は宿舎の前に止まっていたタクシーに乗り込んだ。
　「東京駅まで。」
　「はい。」
　突然、運転手が振り返り、ピストルを青木に向けた。青木はとっさに銃口に指を突っ込んだ。
　「撃つと暴発するぞ。」
　礼だった。けいは礼の手首をひねり、後部座席にピストルを落とした。青木はすぐにピストルを拾い上

げ、礼の頭に銃口を突きつけた。
「東京駅に向かえ。」
礼が運転しようとすると、ピストルで礼の後頭部を殴った。礼は意識を失い倒れた。青木はネクタイでハンドルと手首を締め上げ、公安に連絡した。
「行こう。」
青木は通りに出て、別のタクシーを呼び止めて東京駅に急がせた。
「もう追っ手はこないかしら。」
「わからない。」
「もうすぐ新幹線に乗れるわ。」
無事、東京駅に着いて、２人は新幹線に飛び乗った。２人はタラップの上にいた。青木は公安に４人の確保を確認した。
「怪我はない？」
「私は大丈夫。青木さんは？」
「僕も大丈夫。これで一息つけるね。」
「そうね。ありがとう。まさか青木さんが来てくれるなんて・・・。」
「僕だってリンクできるの忘れてた？」
「ごめんなさい。」
「お互いリンクできるもの同士、助け合おう。」
「そうよね。私、自分のことしか考えてなかった。」
青木はけいを抱きしめた。
新幹線は新大阪に着き、青木はたかやんに連絡した。
「敏君、大丈夫だって。怪我もたいしたことはないって。食堂で夕飯食べたって。今夜は宿直室で寝るそうだ。」
「もう、そんな時間ね。」
「僕たちも署に向かおう。」
青木の携帯が鳴った。
「青木です。・・・はい。・・・はい。ありがとうございました。」
「公安から？」
「うん。竹内は誘拐監禁容疑で捕まったそうです。」
「よかった。これで、敏のことも安心だわ。」
「竹内は今頃、悔しがっているでしょうね。」
「そうね。婚姻届を書かされたときは泣きそうになったわ。」
夜の JR が西宮に向かっている。駅に着くと、たかやんがパトカーで迎えに来ていた。
「お帰り、お２人さん。」
「何でパトカーなんですか？」
「ぱーっと、お迎えしようと思ってね。赤色灯も回してるよ。」
「たかやん、酔っ払ってるの？」
「飲んでないさぁ。」

「さぁ、帰りましょう。」
たかやんはサイレンまで鳴らして西宮署に戻った。署に戻ると、けいはすぐに宿直室に向かった。
「敏、起きてる？」
「あ、母さん。」
「大丈夫？」
「うん、母さんは？」
「私もよ。巻き込んじゃって、ごめんね。」
「いいよ。後でお小遣いもらえれば気が済むさ。」
「わかった。ギョーザも食べに行こうね。」
「うん。」
「じゃあ、おやすみ。母さん、まだ、仕事あるから。」
「おやすみ。無理しないでね。」
深夜の食堂に３人は集まった。
「ルイーズに行けばよかったなぁ。酒なしじゃもたないよ。」
「たかやんったら。」
「けいさんの入れてくれたお茶のほうがいいですよ。」
青木はけいの入れてくれた温かいお茶を飲んだ。
「そうやな。無事に帰ってこれてよかったな。」
「竹内の処分はどうなるの？」
「まぁ、政治生命は終わりだな。でも、保釈金ですぐに出てこれるさ。」
「せっかくリンクできる力があるのに、悪いほうへ使うからよ。自業自得だわ。」
「いい方に使わなきゃね。」
「朝になったら、敏君と家まで送りますよ。今日は疲れたでしょう。もう寝ませんか。」
「そうやな。」
３人は宿直室に行った。
朝、食堂で朝食を食べ、青木は敏とけいを家まで送っていった。
「青木さん、いろいろありがとう。」
「ゆっくり休んでください。」
「青木さんもね。」
「僕、遅刻だけど学校行くね。」
「大丈夫かい？」
「はい。一発殴られたぐらいですから。」
「強いな。」
「じゃあ、行ってきます。」
敏はカバンを持って駅に向かって走っていった。
「青木さん、お茶でも飲んでく？」
「じゃあ、お言葉に甘えて。」

「さあ、どうぞ。」
けいは冷蔵庫から牛乳を取り出して、チャイを作り始めた。
「ごめんね。チャイばっかりで。」
「僕もチャイ好きですよ。」
新聞の一面に「竹内官房長官逮捕」の記事が載っていた。
「午後の飛行機で、東京に事情聴取に行かなきゃね。」
「けいさん。」
「ん？」
「僕と、・・・結婚して下さい。」
「え？」
「今すぐじゃなくていいんです。何年でも待ちますから。」
「青木さん・・・。」
「だって、９歳も年上よ。子供だって無理かもしれないし。」
「いいんです。けいさんが好きなんです。」
「ありがとう。私も、青木さんが好きよ。敏が卒業するまで待ってね。」
「よかった。」
２人は微笑んだ。
竹内は多額の保釈金を積んで、拘置所から出た。しばらくは都内のホテルで生活するつもりだ。早速、けいと青木をリンクしてみようとした。しかし、頭痛がしてリンクできない。何も感じない。
（一体どうしたというんだ？）
その夜、それは起こった。竹内はホテルの１８階から飛び降り自殺をしてしまった。この事故も大々的に報道された。しかし、竹内は自殺する気などなかった。同じように、既に保釈金で釈放されていた４人による犯行であった。
それから一ヵ月後。
カラン、コロンとドアが開き、けいがルイーズに入ってきた。
「こんばんは。」
「おう、けいちゃん。いらっしゃい。」
「こんばんは。あ、西さん。」
「けいちゃん、こんばんは。」
「所長さんになったそうですね。おめでとうございます。」
「ありがとう。」
「もっちゃん、ソルティードッグを。」
「あの若い鑑識さんと、婚約したんだって？」
「そうなんです。」
「おめでとう。」
「ありがとうございます。でもね、私、西さんに憧れていたんですよ。」

「僕の周りの女の子は、みんなそう言ってくれるよ。」
「そうですよね。西さんはどうして結婚しないんですか？」
「だって女の子が寄ってこなくなるからさ。これ、お祝い。」
西から紙袋を渡された。
「ありがとうございます。開けてもいいですか？」
「うん、開けてみて。」
「あ、オルゴール。何の曲だろう？」
西はにっこり笑った。けいはそっとねじを回した。「星に願いを」だった。
「ありがとう。大好きな曲です。」
「そろそろみんなが来る時間だろう。退散するよ。」
「ありがとうございました。」
「じゃあ、また。幸せにね。」
「はい。」
西は店を出て行った。けいはもう一度オルゴールを鳴らした。
「西さんはさりげなくて素敵な人ね。」
「そうだろう。」
もっちゃんは言った。
カラン、コロンとドアが開き、がやがやと２人が入ってきた。
「こんばんは。」
「おう、もっちゃん。久しぶりに西さんに会ったよ。相変わらずいい男だな。」
「今、けいちゃんにプレゼントを持ってきたところなんだよ。」
「そうなの、ほら。」
けいはねじを巻いて、２人に聞かせた。
「お礼言わなきゃいけないな。」
青木は言った。
「いいよな、お前は。けいちゃん、何で俺と結婚してくれなかったんだい？」
「たかやんは大変です。」
「ほいほい。」
「お２人さん、いつものでいいのかな？」
「あ、お願いします。」
「俺はダブルで。」
「了解。」
「本当に幸せそうだからうらやましいや。」
たかやんはぶつくさ言った。
「はいよ。」
もっちゃんは青木に温かいレモネードを、たかやんにはスコッチ・ウィスキーのダブルを出した。
「竹内が亡くなってから、リンクの調子がいまいちなの。」
「え、そうなんだ。二人共？」

「ええ。」
「例の４人組はリンクできんのか？」
たかやんは聞いた。
「もともと、彼らはリンクしにくかったんだけど、ちょっと難しいわね。でも、もう私たちとは関係ないわ。竹内にお金で雇われていただけみたいだし。もう、竹内のようなリンクの使える人がいなくなったし。」
「とにかく、日常生活に戻れたということで、よしとしようじゃないか。」
もっちゃんがまとめてくれた。
一年後。今日は青木とけいの結婚式だった。ルイーズで二次会が開かれた。といっても、いつものメンバーだが。
「結婚、おめでとう！」
もっちゃんが乾杯を言った。
「ありがとう。」
２人はみんなに言った。
「では、けいさん。どうぞ。」
「みなさんのおかげで結婚することができました。そして、何より嬉しいのが敏が兵庫県警に就職できたことです。」
「母さん、自分のこと言いなよ。」
「そうね、こんな私を気に入ってくれて結婚してくれた青木さん・・・、あ、准一さんに感謝します。ありがとうございます。」
パチパチと拍手が起こった。
「僕はまだまだ若輩者ですが、精一杯けいさんを守っていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。あと、１つ報告があります。来年、３月には父親になる予定です。今、けいさんは妊娠４ヶ月です。新しく家族も増えるので一層、頑張っていきたいと思います。」
「しばらく酒飲まないと思ったらそうやってんな。」
「そうなの。高齢出産なんだけどね。」
「がんばれよ！」
二次会はわいわいと長く続いた。

１週間後、青木が目を覚ますと、けいがキッチンでチャイを作っていた。
「ねぇ、また前みたいな頭痛がするの。」
「大丈夫？病院に行くかい？」
「またはっきりとリンクできるようになったみたい。何か・・。」
「准一ははっきりリンクできる？」
「僕は・・・。」
青木はけいのマグカップを触った。
「僕も出来る。」
「もしかしてまた何か起こるの？竹内・・・みたいな強さだわ。」

「感じるよ、ほら。」
青木はけいの膨らみかけたお腹を触った。
「私たちの赤ちゃんが・・・。これからどうなるの？」
２人は不安に包まれた。